
「なんで……？」

ハシリケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「なんで……？」

【著者】

Z7631A

【作者名】
ハシリケンシロウ

【あらすじ】

俺はやめると云つたのに、『まーちゃん』、『隆行』と付き合つちましたんだ……。『あの女』が黙つてねえからやめとけって言つたのに……、『のこと』からたつた一年で結婚しちましたんだ……。

1 「死ぬな」（プロローグ）（前書き）

前作『監獄』の流れを汲んではいますが、今回は真面目なホラーを目標に頑張ります。

最後までお付き合って頂ければ幸いです。

1 『さみなり』（プロローグ）

七海は家路を急いでいた。

通り馴れた道。

何もかも知り尽している筈の道。

だから、この道の危険度は充分理解しているつもりだった。
それが油断に直結したのかも知れない。

或いは、結婚を翌日控え、浮かれていたからかも知れない。

七海は聞いてしまった。

自動車のブレーキが突然最大限に踏み込まれ、制動距離があやふやになってしまったタイヤの悲鳴を。

七海は気付いてしまった。それが自分に向かって急接近してくる」と。

そして、見てしまった。

その悲鳴の主がもう手遅れな程、目の前に迫っているのを……。

『何でわたしが……、
死にたくない……。

明日結婚なのに！

何で！

助けて！

助け……』

自動車は七海の臓物を押し潰し、頭蓋骨をへし折つて、前方の石垣に激突して……、

燃えた。

石垣と自動車の間には……、

七海……。

『隆行……、

『めんね……。

最期に……、

……、……、……、……、……、……、……、……、

せめて……、わたしの口から……、や……、よ……、……、……、

炎は、まだ意識のあつた七海の体を、心を、命を、その存在全てを焼き尽してしまつた……。

1 「さよなら」（プロローグ）（後書き）

ホラーでは初連載になりますが、いつもの持病『落ち切ってない病』が出ないよう気を付けます。

2 七海編 第一部『闇がされたあの世への入口』

『どんよりと曇つた空。』

吹き荒む風。

向こうには、日本の城の様な巨大な建物。
その存在感、圧迫感に押し潰されてしまいそうだ。

今まで経験した事もない強風が、ここがただの城ではないことを物語つて いるようだつた。

辺りを見回すと延々と荒野が広がつて いる。
目標とできそうな場所は、城しかない。

『ここは……、どこだろ？』

見たこともない風景だ。

全く知らない場所に一人で放り出される不安。得体の知れないものに立ち向かわねばならない恐怖が七海の心に重くのしかかる。

『わたしは……、死んだ』

それは認識できている。

だが、

この光景は自分がイメージしていた【あの世の入口】とは大きくかけ離れている。

『とりあえず城に行くしか無さうだ』

七海は城へと向かう……。

目の前には門。

それは、まるで七海の入門を拒否しているかのように高く高くそびえ建つている。

『ここが入口なのかな』

そう思い、扉に手を触れようとした刹那、それは訪れた。

ここはあの世の入口【西の門】……。

ここには、事故で亡くなった方が訪れます

声と同時に空間が歪み、そこから小柄な人型が現れる。

始めはもやもやしたエネルギー体でしかなかつたそれは、時間と共にその形状をはつきりとした形に変えていく。

『……、お化け……？』

空中に浮遊し、融合と凝縮を繰り返すその青白く輝く人型のエネルギー体は、遂に一人の人間としての姿を現し始めた。

小柄な体躯、背丈の割に長めの脚。

がつちりした筋肉質の体格は、アスリートを思わせる。

だが、それよりもっと印象的だったのは、チヨーンジャ「ラジャラ」の革ジャン、革パンツに、ツンツンに立てた赤い長髪といつ、典型的なパンクルックだったことだ。

この亡靈が馬鹿丁寧な口調で語り掛けてくるのだ……。
もはや、【笑える】という感情を超越した不気味さを感じずにはいられなかつた。

『あなたは……？』

『私は、西の守護神【広目天】……、……、つて、止めた止めた。
こんな堅苦しい言葉、俺の口から出すもんじやねえよな』

やはりこの類だつたか……。

だが、七海を不気味がらせていた雰囲気は一向に消えていない。
なにか、存在自体にまがまがしさが漂つてているような感覚を覚え始めていた。

『とりあえずあんたが今置かれてる状況を説明するぞ。

お察しの通り、この門は【あの世への入口】だ。

あんたがあの世へ逝く資格を完全に満たしてゐるなら、触れただけで開く

『……、もし……、満たしてなかつたら……？』

『当然満たすまで開かねえ』

あの世へ逝く資格。

それがなんなのかは解らない。

おそらくこの空間に於いてそれを理解しているのは広目天を名乗るこのパンクスしか居ないだろう。

七海は恐る恐る、扉へと手を伸ばす。

《お願い！

開いて！

たいした距離ではない。

目標の扉は目の前に有るといつてもよかつた。

が
…
、

七海の不安がその距離を詰める」と躊躇させる。

『逝けなかつたらどうしよつ……』

じわじわと詰まつていく距離。

小柄なパンクスに見守られながら……、ゆっくり、かつ、確実に詰めていく。そして遂に……、

【運命の刻】

『開いて！！！』

目を閉じて祈る七海。

目の前には、門……。

その扉は固く閉ざされたままだつた。

『なんで？』

2 七海編 第一部『闇やされたあの世への入口』（後書き）

次回予告ー

七海です三（ーー）三

『ななみ』と読みます（<○>）

あの世に逝き損ねたわたしは【広田天】と共にその元凶を探る旅に出ます（<○>）／

次回「なんで……？」

七海編 第一部

『七海を縛るもの』

謎が謎を呼び……、複雑に絡み合つ……。

……、なんのひひや（<○>）／

以上、七海でしたー（<○>）／

3 七海編 第一部『七海を纏む女』（前書き）

予告と若干内容がずれてしましました（^。^；）

今後も度々有るかと思いますが、大筋はずれませんので、なにとぞ
ご容赦ください（――）

3 七海編 第一部『七海を纏む女』

『なんで……？』

荒れ狂う風。

あの世に抱呑まれてしまつた七海にとつてそれは、あまりにも冷たく、そして、恐ろしげなものとなつた。

『どうしよう……。』

『逝けない、あの世に、逝けない！』

その田には涙が溢れている。

『どうしよう。
わたしずっとこのままなんて……』

【広田天】は落ち着いた物腰で、だが、ヤンキー口調で語り掛けてくる。

『あなた、一回現世に戻つたほうが良くなえか？』

それも一つの方法だとは思つ。

だが、原因がはつきりしていない以上、行動を起こすのは時期早焦な気がする。

『なんで……？』

それは、至極妥当な質問だ。このパンクスならば間違ひ無くあの世の仕組みを知つてゐるのだ。

なにせ、【西の守護神】なのだから。

『あんたは縛られてんだよ。

なんかがあんたを現世から離れたくなえって強く思わせてんだ。
あんた自身があの世に逝くのを心のどつかで拒んでんだよ』

『自分のせい?』

そんな自覚は全く無い。

確かに隆行に自分の死を告げられなかつたこと、別れの言葉を述べられなかつたことは悔やまれるが、それは、さほぞ氣にしてはいいのだ。

他に思い当たる要素は皆無であると断言する」ともできる。

相変わらず突風は轟音を発して通り抜けていた。その音はとても大きくて、この広大な空間に一人で放り出された現実をリアルに伝えてくる。

騒音公害にも匹敵する劣悪な環境が、著しく思考力を低下させていく。

『……、ダメ、ダメ、逝けない、逝けないよお』

心からうろたえていた。

だが、それを嘲笑うようにビくんよりと沈殿しているかのような重苦しい空気が、じわじわと自分を取り囲むのを感じとり、七海は反射的に【広田天】に田をやつた。

そこには今まで見たことも無い【鬼神】がいた。

出会つた時から感じていたまがまがしいオーラをさらに増幅させて、遺憾無く撒き散らしている。

『黙つて呪つことか……。

おまえをあの世に逝かさねえと俺はポイント貰えねえんだ……。

びつしても早く復活してえんだよ。

邪魔すんなよ……』

まだ七海が生きた人間であつたなり、間違い無く足元に黄金色の海を広げていたであろううとつもない恐怖が、心の底から沸き上がつてきた。

『なに、わたし殺されるの……？』

靈体となつてゐる七海には、本来なら有り得ない筈の、命を奪われる恐怖。

その、気が狂つてしまつやうな感情がありますます冷静な思考力を削ぎ落としていく。

『……、……、……』

もはや、七海は思考力を失つてしまつた。

『さあて、準備完了だな……。

黙らしちまえばこいつらのもんだ』

広目天は呆然として座り込む七海に田に向ける。

『よし、引きずり降ろしてやるか。

あんたみてえに俺を信用しねえ奴には、いりするしかねえんだ』

なぜ信用してもらえないのか。

それは自分なりに理解しているつもりだ。

守護神にはふさわしくないまがまがしい雰囲気。

それは、本来ならあの世どころか、この場所に居ることすら許されない者であることの証なのだ。

『俺みてえなのは、復活するのにかなりのポイントが必要なんだよ。しかも、かなり厳しい期限付きで……。

そう、俺みてえな殺人鬼は……』

それが広目天がまがまがしいオーラを放つ原因であり、この様な強行手段に打つて出た理由だった。

復活とは転生の事を指し、あの世に逝つてからの働きによってポイントが割り振られ、生前の社会貢献度によって設定された上限まで達したとき、復活する資格を得る事ができる。

本来なら無条件で地獄行きな筈の殺人犯である広目天が、あの世に逝けずとも復活の権利を得ているのは、生前の社会貢献度が犯した罪より遙かに上回つていたからであり、このようなケースは死後の世界に於いては、かなり稀な特例といえた。

『冗談じゃねえぞ。

百年以内にポイント一千万だなんて……。

無理難題にも程があるんだよ！－』

八月の一ヶ月間のみ、現世で実体化することを許された【ポイント上位二十名】ですら、年間で一万五千ポイント貯まれば両手を挙げて大喜びの世界である。

この条件はかなりの無理難題と言えるのだ。

彼は対象を現世に連れていく前に、必ず現世の様子を窺う。ことに今回のケースのように、相手を縛るものが恋愛感情だった場合は、状況次第で悪霊や怨霊に化けてしまう可能性が多分にあるからだ。

広目天は、七海が思考力を失っているのを確認した後、両手で己の背丈と同じ程度の長方形を描く。すると、その空間にエネルギーが集まり始め、彼が七海の前に姿を現した時と同様の収束と凝縮を始め、鏡へと変化した。

鏡には、一人の男。

おそらくこれが隆行だろつ。

泣いている。

涙を拭つた影響なのか、目の周りが赤く腫れている。

そこに現れた女。

それを見た広目天は、自分の目を疑つた。

『麻里愛！？

なんで麻里愛がこの男に！？』

麻里愛は、隆行に一聲掛けると、その場を立ち去つて行つた。

『なんだ！？
ダチかなんか？』

ひとまず安心だ。

もし麻里愛が隆行と付き合つていたら、まして、結婚などしていうものなら、七海は確実に化けてしまつだろう。
なにせ、まだ死んでから三日しか経つていないのだから……。

だが、もし麻里愛が七海、隆行共通の友人であるならば、この状況にも合点がいくのだ。

『対象を化かした挙句、その怨みの対象が俺の娘だ、なんてことになつたら堪んねえからな……』

麻里愛は、広目天の忘れ形見だつた。

彼等にとつて、最初で最後の子供だつたのだ。

母親もまた亡くなつていて、両親共通の友人だつた門倉夫妻に遺言を遺して引き取つてもらつたのである。

『神奈……。

絶対におまえと同じ時期に復活するからな……。

そしてまた、出会いつて、今度こそ結ばれて……、俺は平和に、おまえは健康に、お互い人生を満喫しようぜ……』

それは、彼の立てた目標であり、誓いでもあった。

暫く麻里愛は出でこない。

どうやらただの友人のようだ。

隆行はなおも泣き続けていた……。

七海が正氣を取り戻したとき、そこには、鏡を覗き込む広田天が居た。

小刻に震えながら、食い入る様に見据えている。

気付かれないように覗いてみると、そこには、見覚えのある男が映っている。

隆行だ。

涙で顔を泣き腫らしている。

『あんなにわたしのこと、想ってくれてるんだ。

まるで時間が止まっちゃったみたいに泣き続けて……。

わたしが動かしてあげなきゃね、彼の時間を……』

七海は覚悟を決めると、広田天に向かつて声をかける。

『あのお、降ろして下さい、現世に』

その声に対する彼の反応は、驚き、焦り、そして、怯えているよう

だつた。

≪なん
で
? ≫

3 七海編 第一部『七海を纏む女』（後編）

次回予告ー

広田天だ！（^○^）／

いやあ、参った。

（・・・・・）

まさか対象の彼氏と麻里愛が関わってたとはな……（トロト）

でもただのダチみてえだし、サクッと別れを告げさせて、一件落着
といつかあ￥（^ー^）／

とか思つてたらあいつら……（ーーー#）

次回「なんで……？」

七海編 第二部
『墮ちてゆく海の底』

謎は……、

全て解けた！

つて、もうかよ！？
(^。^;)

以上、広目天だ
¥(^ー^)/

『わっ、解った。

解った解った』

【広田天】は、明らかに動搖していた。
自分に女の勘の強さというものはあまりないと思つたが、それでもはつきりと解る形でうなたえている。

『なんなの？

あれほど脅してまで降ろそうとしたのに、いや、降ろせと言つたらあのうなたえようは。
わつきの隆行の映像となんか関係があるの？』

余程【広田天】にとって都合の悪いことがあったのだろうか。

正直、自分に都合が悪くなればいい。

この【広田天】という亡靈は余りにも信用できないのだ。

彼はあわてて鏡を片付けていく。

自分を取り巻く全ての状況が急展開している。

このままだと、自分自身がついていけない程、急加速するのではないかという、嫌な予感が心の底に大きくわだかまつた。

風が、轟音を轟かせて二人をすり抜けていく。

広目天は取り敢えず現世に降りることに決めた。
迷ついてもらちがあかないのだ。

『じゃあ、手繋いで』

七海の手を強く握り込み、意識を現世へと、集中させる。

七海達は現世へと降りてきた。

七海が燃え尽きたあの交差点だ。

ここは地元では見通しが利かないことで大変有名な【死の交差点】
として、色々な注意看板がひしめいている。

【止まれ、よく見よ】

【飛び出し注意】

といったものから

【死亡事故多発】

というものまで、その種類は実に豊富だ。

それでもひつきりなしに死亡事故が多発する。

それはひとえに、道幅の狭さに由るものだらうと七海は分析している。

それに、マラーも信号もない。

まさに事故を起こしてくれと言わんばかりの交差点なのだ。

「マジかよー?」

「なんでこんなとこにリリバーの一つもねえんだよー?」

「」近所とか、学校とかも市に連絡は出しているらしいんですけど、会併に忙しくてなかなか予算を組む暇が無いようですね」

「なんだよそれ!」

「住民そっちのけかよ……」

【広田天】が、一頻り怒りをぶつけた。

それほどあからさまに危険なのである。

「まあ、わたしの場合まつりにも非はあるんですけど」

「なにやつたんだよ?」

「一時停止不履行」

あの時は隆行との未来への希望で頭がいっぱいだった。
だから……、不履行。

この交差点に足を踏み入れた時点で、自動車は田の前にいた。

突然、

迫つてくるタイヤの悲鳴。

自動車が自分を押し潰す感触。

頭を強くボンネットに打ち付けた痛み。

そして、炎の灼熱。

自分が死に際に味わったもの全てを思い出してしまった。

「ここは七海が死んだ現場だ。」

それも、まだ、石垣には亀裂や焦げが残つたままだった。

血痕や肉片といった七海の面影はきれいにぱり片付けられているが、事故の面影が鮮明に残っているのだから無理もない。

「早く！」

早くここを離れましょうよー。

早くーーー！

わたし、おかしくなつちやーーー！」

七海が騒ぎ始める。

【広田天】もそう判断したのだろう。

降りたときのよに、小刻に震える七海の手を強く握り込んできた。

「イメージしろーーー！」

隆行とやらのことを強くイメージするんだーーー！」

突然の豹変に、口調もボリュームも強くなっている。

七海は必死にイメージした。

《隆行に会いたい

隆行に会いたい

隆行に会いたい

やがて一体の亡靈は、空間の中へと消えていった。

広目天は七海を引き連れて隆行の家の前に届く。

その表札には【神林】と書かれてある。

どうやら神林隆行かんばやし たかゆきというのが隆行の正式名称らしい。

「ええと……、名前は？」

「そういえばまだ訊いてなかつたよな」

「えつ、佐島さじま七海ななみですけど」

七海が答える。

「七海ちゃん。

これから隆行の家に入るぞ。

覚悟はいいか」

一応確認を取る。

婚約者と言えど他人だ。

なにが起るか判らない。

もしかすると、この短期間で麻里愛まりあいとできてしまふかも知れないのだ。

この問いは、自分への問いでもあった。

「なんの覚悟ですか？」

「ここは昨日でわたし達の愛の巣になつてゐる筈の家ですよ？」

「いいんだな？」

この時点で広目天の覚悟は決まった。

対象の意思は絶対尊重。

それが、ポイント荒稼ぎの基本なのである。

「じゃあ……、いくぞ!—」

「はい!—」

時は、午前一時。

神林宅の寝室には、愛を確かめ合う一組の男女がいた。
二人の名は、神林隆行と、門倉麻里愛といつた……。

『なんで……!?』

空気が自分のすぐ横から乱れ始めるのを感じ取った広目天は、堪らず横を振り向く。

そこには、鬼のような形相で髪を逆立てながら一人を見つめる七海の姿があった。

広目天は神格を持つ高級靈だ。

その能力の一つとして、相手の心を読む能力がある。

七海はまだ化けてはいないようだ。
だが、信じる心が揺らぎ始めている。
こう繰り返しているのだ。

『なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで……』

七海の心せ、（七）海（皿皿）の底に墜ちてこつた……。

4 七海編 第二部『恋ひてゆく海の姫』（後書き）

次回予告！

今作初登場の勇氣つす（<○>）／

本編登場前にじいじが出てゐるなんて、びっくりしちゃう（^__^）

さてさて、次回は俺と、マスターであるまーちゃんが彼氏の婚約者の怒りを鎮めようと大奮闘

¥（^__^）／

次回「なんで……？」

麻里愛編 第一部

『お願い信じて！』

あの世に向かって、テイク・オフ！

つて、死なねえって

()

以上、勇氣でした

m () m

5 麻里愛編 第一部 『お願い言ひへー』(前書き)

長くなってしまった(トト)

申し訳ありません

m — () m

麻里愛は隆行や七海とは幼馴染みだった。

物心がついた時点で、もう既につるんでいた。

門倉家の子供というのが門倉夫妻の五つ子と【広目天】夫妻の五つ子の同じ年の男女都合十人という、少子化が叫ばれる昨今に於いては極めて社会貢献度の高い構成であつたため、いくつかのグループに分かれて行動していたこともあって、常々つるんでいた訳でもないのだが、この三人は同じグループになることが多かつた。

それだけに、この二人は他人の中では最も近くにいる存在と言える。

麻里愛と、七海は親友だ。
だからこそ、

『まさかわたしを黒りやしないだり』
と、高をくくつていたというのもあるし、明らかに隆行が彼女をパートナーとして求めてきたということもあつた。
あまつさえ、麻里愛自身が隆行を恋愛対象として、諦めてはいなかつた。

だから、交際を始めてしまつた。

そして今、一糸纏わぬ姿で重なり合つてゐる二人の後ろに、怒りで
髪を揺らめかせている七海がいる。

麻里愛はその只ならぬ気配を察知していた。
下腹部の筋肉が、勝手に萎縮していく。

「うお！」

痛え！

なんだよなんだよ！？」

突然襲つてきた麻里愛の膣痙攣に隆行が悲鳴をあげる。

「『めんねタツキ』……。

見えないかな……？

あんたの目の前、わたしのすぐ後ろに居るの。
見えないかな、ブチ切れてるナナが……」

隆行の目が大きく見開かれる。

「ちつ……、違うんだナナ！」

おまえを口ケにしてる訳じやないんだ！

違うんだ！

違う……

見る間に田と口から透明な体液を出し始める。

「いやああああ！」

今度は麻里愛の悲鳴。

自分の下腹部の内側がさらさらした液体によつて温められていくの
を感じ取つてしまつたのだ。

これは則ち、自分の体内が他人の生命活動のカスにまみれてしまつ
たことを意味する。

温かみを伝える範囲が徐々に広がつていく。

「やだ汚い！」

汚い汚いいい！」

なおも泣き喫いている麻里愛の意識に聞き馴染んだ声が直接飛んできた。

『わたしただこ』に突つ立つてただけなのに、まーちゃん酷い目に遭つちゃつたねえ。

訳の解らない病氣かつ喰らひつけやうか?》

七海が威しをかけてくる。

「嫌だ……！」

△わたしはなはもじてない△

どっちかが普通になつてくれれば、まーちゃんは助かるんだからさ》

命乞いをして、この有り様だ。

『死んじゃうよ』とこの言葉に、なんとも言い難い恐怖が押し寄せてくる。

下腹部の奥に、液体が溜つて行く感触、そして、少し前からそこに発生した鈍い痛みが、その言葉に現実みを与えていく。

「「「みんなでこー！
」」」みんなでこー！

許してください！

許してください！

許してえー……

麻里愛の精神も、隆行同様死に対する恐怖と嫌悪感に潰されていく。

「助けてたすけて……、ゆーちゃん助けてえー！」

絶叫と共に、それらの負の感情によつて引き起こされる生理現象を一気に発現させてしまった。

勇気は成り行きを見守つていた。

本来なら、麻里愛にいい意味で取り憑いている靈として、助けてやらなければならぬのだが、対象が完全な悪靈ではないうえに、命を脅かしているものが、麻里愛や、隆行の生理現象なのでは、手も足も出せない。

出しうるがないのだ。

『畜生！

助けてつたつて、どうじょうもねえしなあ』

ほとほと困り果ててて、突然彼が生前にも死後にも経験したことの無い、全身を駆け抜ける小気味良い衝撃のようなものが

走るのを感じる。

そして、気が付くと、自分の体が本来の人形とは全く違つ形で実体化していた。

『槍？

俺が槍になつてゐる？

どういふことだ？

俺はこんなもんには少しもなりたかねえぞ？』

あまりの訳の解らなれど、原因不明さに、頭の中が【?】で一杯になつてしまつた。

『なんだ？

どうこいつひた？』

自分の意思とは関係のない実体化なのだから、もはやマスターの意思としか考えられない。

出合つたときに、

「わたしのために働いてもらひわよ」

と言いついていた麻里愛が、自分を使って何かしようとしているに違ひないのだ。

『なにをするつもりなんだ？』

自分を槍に変えた筈の麻里愛が、全くそれを手に取る気配を示さない。

それどころか、彼女自身が勇気が変化した槍に驚きの表情を浮かべている。

どうにも次に取るべき行動が決められず、悶々としているところに、突然、いつそや麻里愛が【クイズ ミリ○ネア】に挑戦したときの司会者にそつくりな、しかし全く初対面な男の靈体が勇氣に向かつて手を伸ばしてきた。

あの司会者は麻里愛の五つ子の兄だ。

とすると、この男が彼女の父親なのだろうか。

それ程この靈体と、門倉慶太は似ていた。

手を伸ばし、手に取るのとしたところで、男は苦痛に顔を歪めながら手を引いてしまった。

「おいあんた！

プロテクト外せ！

麻里愛じやまだ駄目だ！

あんたを使いこなせねえんだ！」

男が言葉をかけてくる。

突然どこから湧いて出て、この言葉。

あまり良い印象は持てなかつた。

「なんだてめえは！」

勇氣の言葉も、自然と喧嘩腰になる。

「なんだと叫びてゐる場合じや……！」

男の台詞が終わらないうちに、今度は、麻里愛達に威しをかけていた女の靈体が勇氣に手を伸ばす。

そして、男もそれを阻止しようと必死に手を出してきたが、タッチの差で女が勇氣に触れた。

「がつ、ぐわい、わい、わい、」

言葉にならない言葉と苦痛に満ちた表情で、不快感と苛立ちを示す。

「んあああああ……」

折角男との競争に勝った女だつたが、結局は、勇気を握り込むだけで白い絨毯の上に放り出してしまつ。

痛みで息を切らせながら、鬼の様な顔付きで麻里愛を睨み付けている。

「なかなか……、面白い事してくれるね……、まーちゃん……」

少しも面白がつていないので「」とは、顔付きを見れば、一発で解る。

勇気は、この状況でもなんの手出しあり出来ない自分に苛立ちを感じ始めていた。

閉まつている窓を覆い隠してこのカーテンが激しくはためき始めた。

「お姉ちゃん……」

俺はあんたとやつ合いつもりはねえ。

俺の意思で化けたんじゃねえし、まーちゃんだつて、俺を見てビビつてた。

ビビりも無関係なんだ！」

取り敢えず自分達の現状を説明してみる。

これでビビにかなるとも思えないのだが、何もしないよりは、マシ

だ。

「面白い事言うわね。

あんなプロテクト掛けて靈体を拒絶してたくせ!。
なんで死んだ後でこんな痛い目に遭わなきゃなんないのよ!..」

四本あるベッドの脚が全て激しく軋み、直ぐにへし折れた。

パン!

とこう銃声に似たラップ音が、静まりかえった部屋に、激しく響き始める。

「おこ、まーちゃん!..

まーちゃんからもきつちつ説明しり!..

それと、多分まーちゃんの親父!..

ボーッとしてねえでなんかしろよ!..

おめーが連れて来たんだろうが!..!..

大きな爆発音を発して、箱型テレビが砕け散った。

ラップ現象や騒靈現象により、見る見るつわに、隆行の寝室が破壊されていく。

「ナナ、ごめんね。

あたしはこんなつもり無かったの!..

「ないならなんで今ドッキングしてんのよ!..

なんで今隆行の〇〇〇〇〇、腫瘍で股ぐらに固定して、わたしにビった隆行の〇〇〇〇から下腹におしつけ込まれて、感染症になりがかつてんのよ!..!..

一々最もな意見だ。

そうこられるともう、麻里愛も何も言えないだろ？

これが、現場を押さえられた、いわゆる【現行犯】の弱味であると言える。

部屋の中央付近の壁に立掛けであつた書棚が、大きな音を発てて砕けた。

騒靈現象は、前より激しさを増している。

それは、より一層この女の感情が高ぶつた事を意味しており、前にも増して危険な状況になってしまったことを示している。

麻里愛の説明は、マイナスの効果しか生まなかつたようだ。

「じめんねナナ！

あたしもつやんないから！

向こう一年はセックレスレスを約束するから！

だからお願ひ！

信じてよ！

お願ひ、信じてえー……

確かに、セックレスレスを誓つのも、手だとは思つ。だが、ほぼ間違い無くこの女が望む回答ではない。

案の定、女の髪が激しく揺らめき、部屋中の壁が、ベコベコへこんだ。

パパパパパパアン！

ラップ音も、リボルバー式の拳銃を速射したかのよつた激しきとなつていてる。

もはや、キレてしまつたといつていゝ状況だろ？。

「……、ざけんな……。

別れる！

それが嫌なら、雁首揃えて……、死ね。

わたしがお前らを殺してやるよ。

どつちか選ばせてやるからあいがたく思いな……

やはりキレイでした。

殺す気満々になつてゐる。

それでもおそらく、麻里愛は別れるとは言わないだろう。

全面抗争の様相を呈して来そうだ。

「そんな……。

なんで！？

なんでそんな酷いこと言つのーー？

なんで……？

なんで……？

麻里愛は女に疑問符を繰り返し繰り返し投げ掛けていた。

次回予告！

麻里愛です（^○^）／

ナナに「殺してやる」って言われるわ、タッキーに体内におしゃこ

かなりキレちゃいましたが、とにかくナナに帰つてもらわないとら
ちがあきません(^ー^ ;)

説得にしきじつたあたしらは、闘う姿勢を打ち出して、ナナを追い返しにかかります（Ｔ・Ｏ・Ｔ）

次回 「なんで……？」

麻里愛編
第一部

『受け継がれた陰陽師の能力』

世界はあたしを中心いて動いてる……。一

えつ！？

違う！？

わーてるわよ、そんなこと……。

（かなりキレイです）

（へ）

以上、麻里穂でした

（<○>）へ

「どうやら七海には帰つてくれるつもつは毛頭無いらし。」

それならば、どうしても追い返してしまわなければならなかつた。

今はまだ実感するには至つてはいないが、状況的にはほぼ間違い無

く【身体、生命の危機】なのである。

七海自身の【殺してやる】宣言、そして、下腹部の違和感。このまま長時間この状況を放置してしまつのはあまつにも危険すぎる。

「わかつた……。

あたし、別れる」

麻理愛の口から、遂にその場しのぎのままかせが出てしまつた。勿論隆行と別れるつもりなど毛の先程もない。

この状況を放置すれば最低でも生殖機能を、最悪の場合には、生命を失つてしまうのだ。

だが……、

「あつ！？」

「いだつ！」

「痛い……！」

との、麻理愛の悲鳴があがるといつ結果しか生まなかつた。

「わたしをナメてんのか？」

女にその手の嘘は通じねえつて、おまえにも解るだろー。」

麻理愛の左足小指を念力でへし折りながら七海は続ける。

「身体中の骨、有り得ない向きにひん曲げるぞ！？」

はつきりしろよー

別れるのか別れねえのか！？」

このめくらましは見抜かれてしまつたらしい。
それどころか、確実に怒りに油を注いでいる。
その証拠に二人が身を乗せているダブルベッドが、隆行のの直ぐ足
元から寸断されてしまった。

窓ガラスが三枚ほど、盛大な音を発して碎け散る。

寝室を元の状態に戻すには、もはや五桁、六桁では済まないだろ？

殺される。

その予感は、徐々に現実味をおびてくる。

あまり、こいつの方向には展開させたくなかつたが、残念ながら戦
うしか無さうだ。

「ゆーちゃん、助けてえ！ー！」

勇気がばけてしまつた槍。

それは、間違ひ無く自分の意思で変化したのであつたことを
麻理愛は理解していたのだ。

勇気は、

「俺の意思じゃねえ」

と言つていたし、七海やパンクスは、長時間触れていたことを
来なかつた。

残る関係者は、自分だけ。

簡単な消去法である。

自分の意思の力で勇気の状態を変えてしまったのだから、もしかすると自分の手元に呼び込むことが出来るかもしない。

案の定、槍は麻理愛の手元に飛びように引き寄せられる。まるで吸い付くような絶妙なフィット感だった。

世界最高峰の武器職人に発注しても、これ程のフィット感は出せ無いだろう。

それは、やはり麻理愛の意思により勇気が変化したのであるとこつことを如実に物語つっていた。

「面白え……。

わたしを殺す気満々って訳か……」

七海が不敵な笑みで受けて立つ。

目覚まし時計のベルが勝手に作動し始め、振動によってひび割れ、そして、崩壊する。

それと同時に、麻理愛の左足中指も関節の可動方向とは逆に可動してしまった。

「ぐきいっ！」

言葉にならない声で痛みを表現する。

更に続けて、麻理愛の利腕である右腕の自由を奪つたため右の鎖骨を狙つたようだが、それは未遂に終わつた。

パンクスがとつさに結界を張つてくれたらし。

勇気を手に取つたもののどうすれば良いのかどうにも扱い方が解らない麻理愛は、とにかく脅すことにした。

親友を、しかも、既に死んでしまつてゐる親友を【また】殺してしまつことなど、どうしても考えられない。

脅しで帰つてもうえらんならば、それに越したことはないのだ。

「わつ……、わわわす、わすわす……、刺すわよー?」

本気だよ……!」

本気……なんだよー!」

……、迫力も、威厳も、説得力も、何も無い。
そんなことは、麻理愛自身にも解つてゐる。
完全にしぐじつてしまつていて。

案の定、七海が腹を抱えて笑つてゐる。

味方であろうと思われていたパンクスもライブでもしてゐるかのようになつて、頭を振り乱して笑つてゐる。

あまつさえ、手にしている槍（勇氣）でさえ、フルフルフルフル小刻に震えていた。

目の前に落ちてゐる【お札】のお陰で七海は麻理愛に手を出せなくなつてゐる。

だが、だからと言つてこのまま持久戦に持ち込むのは得策では無い。
下腹部の違和感。

それが少しずつ、はつきりとした形の痛みに変わつてきているのだ。

『死にたくない』

その思いが、 麻理愛を鬼に変えた。

「消えろおおおおー！」

悲鳴のよつた雄叫びをあげ、 槍を突き出す。

この第一撃を七海はあっさりかわしてしまった。

恐怖と痛みに手元が震えているのだ、 無理もない。

だが、

麻理愛、 勇氣組の本領が發揮されるのは、 これからだった。

《ショートー》

麻理愛がそう念じた瞬間に、 右側に槍がカーブした。ソフトボール部も野球部もどちらも経験したことのある彼女は、 物体の移動に関してはとかく野球用語を使つてしまつ。ショートとは、 利き手方向に水平に曲がる変化球だ。

槍は、 ショートすると同時に丈もこくらか伸ばしている。元が靈体であるがゆえに、 余程非常識な要求ではない限りは応えてもらえるらしく。

じわりじわりとこの武器の使い勝手が理解出来てきた。

七海は、 この第一撃もかわす。

陸上部で培つたフットワークは伊達ではないらしい。

《カーブー》

今度は、左下へと動かす。

すばしこい相手ならば、足を殺してしまつのが一番手つ取り早い手段なのである。

今度はヒットした。

切つ先が、七海の左大腿を貫く。

「ぐあああああ…」

けたたましい悲鳴をあげながら七海は神林邸から消えた。

七海はいなくなつた。

だが、それは一時的なものであり、根本的に解決したわけではない。神林邸に七海に対する結界を張つてもうつ頼む。

「神の名のもとで、この空間に於いて邪惡なる念が存在することを禁ず……」

神林邸の四方に位置する場所にお札を貼り付けながら呪文を詠唱している。

そして、家の中央の床にマスターとなるお札を貼り付けると同時に、

「禁…！」
と叫んだ。

途端に、七海退治に一役かつてくれた背後霊、佐野勇氣。

彼が突然靈体に戻り、更に唸り声をあげて苦しみ始める。

確か彼は、交際していた女性に頸動脈を切断されて殺害されたと言

つていた。

もしかすると、その女性に対する恨みがまだ残つており、それが今回【この空間に存在することを禁じる邪惡なる念】であると、この結界に判断されてしまったのかもしれない。

「結界解いてくれ！
直ぐに解いてくれ！
早く解いてくれえ！」

勇気が必死に助けを求めている。

「おまえ、怨靈だったのかよ……」

パンクスが沈痛な面持ちでマスター札を剥がす。

「はあ、ふう、痛かつた……」

勇気が、息を切らせながら感想を述べる。

「つたくしゃーねーなあ……。

麻理愛！

結界札の作り方教えるから、何でもいいから無地の紙と書く物持つてこい。

ついでに使える技もいくらか教えてやるよ

『今あたし、動けないこと解つてないのかな』

このパンクスの観察力の低さに呆れながら、手近にあつた油性マジックを手に取る。

紙ではないが、無地の物には、自分が身を預けているベッドのシート

ツを代用した。

今麻理愛は脛痙攣により、隆行とドッキングしたまま身動きがとれないのだ。

シーツは今、己が垂れ流した涙やら涎やら尿やらぐしゃぐしゃ汚れていたが、動けないのだからしかたがない。

こうして、パンクスの結界及び、技の伝授が始まった。

たつた一度パンクスから指導を受けただけで、陰陽五行の基本的な概念をほぼ全て発現させることが出来るようになつたことに一番驚いたのは麻理愛自身だった。

「なんであたし……、こんなにすんなり身に付いたんだろ?..」

七海の事も気になつてはいる。

親友であり、今は、己の命を狙つ者でもあるのだから、無理もない。

だが、それ以上にこのパンクスの存在がとても気になつてきていた。勇気が麻理愛の親父と呼んでいたこともあるし、慶太と瓜二つであることも気にかかる。

彼女は、実の父親に対して強い怒りを持つている。

そして、その怒りは心の傷として、今もなお残つている。

だから麻理愛は切り出した。
切り出してしまったのだ。

「お父さん……、なんで……？」

次回予告一

広田天だ￥（^—^）／

ゼリややら麻理愛に父親なことをばれちまつたらしい（。）

ヤツベーな……、ここから門倉夫妻から俺のこと逐一聞いてんだ
よ……（^—^・）

そう、俺が大量殺人犯であることも……（トロト）

ゼツテーぐじぐじ因縁つけられるぞ（、。）

と思ってたら、案の定つけできやがった（トロト）

あれはしゃーねーんだよ！（ー・#）

次回「なんで……？」

麻理愛編 第三部

『受け入れられない真実』

どうしても受け入れることが出来ないとき、人はその想いをどうするのだろうか……？

知るかつ…！（＿＿＿#）

以上、広田天だ（^○^）／

【お父さん、なんでのー?】

麻里愛の実の父、赤星拓真は、とある大量殺人事件の犯人であるとして、十年前に絞首刑となつたらしい。

育ての親である門倉夫妻は、そのことを赤星系の5兄弟にはひた隠にしてくれていたが、それも長くは続かなかつた。

思春期。

大概の者は、ここを境として初めて親のレールから外れてみようと試み、己自身の責任の下に自分の判断によって行動をとり始める。

麻里愛が両親の敷いたレールから初めて逸れたのは、やはりこの時期だった。

やーーーーー、おまえのとつひやんひとーーーーー

これは、麻里愛が幼稚園児の頃から、言われてはいた。実は、同じクラスに被害者の遺族の息子がいたのだ。

その頃は、父ちゃんとは単純に育ての親である、岩隈（門倉）竜也のことだと思っていた。

だが、中学校にあがり、理科で【遺伝の法則】なるものを学ぶに至り、

『あたしの顔、あの両親から生まれていい顔じゃないんじゃないの

といつ疑問を持つてしまい、自力による独自調査によつてその結論に迫りつとしたのである。

その結果得たもの。

それは、思春期の女の子にとつては、あまりにも重すぎる事実だつた。

【父親は、閉ざされた吹雪の山荘で、三日間で一桁の人数を殺した殺人鬼である】

【母親は探偵で、父親をその事件の犯人として捕まえている】

【父親は裁判で死刑を宣告されたが、上告せず、しかも、投獄後、全く反省の色を見せなかつたため、投獄六ヶ月で刑が執行されている】

【母親は、自分を産み落とすことが直接原因となつて、この世を去つてゐる】

知れば知るほど、両親が修羅の道を歩んで來たこと、そして、自身が真実の重みに押し潰されてしまう危機感を感じにとつてしまつていた。

そして遂に……、嘘であると証明するために、当事者の口から完全否定してもらうために問い合わせ正した両親、門倉美和、岩隈（門倉）竜也の口から、出でしまつたのだ。

「おまえ、どこでそれ調べて來たんやー？」

という言葉が……。

もはや、決定打だつた。

当事者。

それは、事件当日、現場に居合わせた者のことを指す。

現場にいた二人。

しかも、探偵として、母親をサポートしていたという二人の語る眞実には、もはや疑問を差し挟む余地すらない。

両親のあまりにも隙の無い論理の構築に、否定するつもりで事件の真相を聞いていた麻里愛も、どうにも【赤星拓真が犯人である】と認めざるを得なくなってしまい、黙つてその場に座り込んでうなだれることしか出来ない。

残念ながら彼女には、両親、特に、父親を恨むことを生きる糧とするしか、この問題に対する消化のしかたがみつかなかったのだ。

そんな麻里愛に、やつとタイミングが巡つて来たのだ。
直接父親に思いをぶつけ、しかも、犯人自身の口から事件の真相を聞く事が出来るタイミングが。

「今更どの面下げて会いにこれるのかしらね……」

まず牽制から入る。

今まで憎んでいた相手にいきなり打ち解けることなど出来る筈も無い。

とにかく麻里愛の心の中には父親に対する憎しみのブリザードが吹き荒れているのだ。

パンクスは申し訳無さそうにうなだれながら麻里愛の話を聞いている。

そして、慎重に言葉を選んでいるのだろうが、暫く考え込むよう黙つたあと、ようやく言葉を発した。

「悪かった。

でも、どうしてもあの時はああするしか無かつたんだ

言いたい事は解らなくはない。

解らなくはないが、納得出来る言葉ではない。

「そうだね。

人殺しはみんな、自分を正当化するんだよね」

聞く耳持てない訳ではないが、全面的に信用することは出来ない。麻里愛は自分の中に吹き荒れるブリザードを、なおもパンクスに向けて吹き放ち続ける。

「お母さんは被害者達を直接殺さずに、社会的に抹殺する道を探してたそうじゃない？」

ただ単に、お父さんの気が短かつただけなんじゃないの？」

赤星拓真の犯行の動機は、交際していた女性を自殺に追い込まれたことに対する復讐だった。

そして、この女性の姉が麻里愛の母親、岩国神奈なのである。どうしても神奈の思考と比べると父親の行動は、かなり短絡的であると言わざるを得ない。

「それ言われちゃ……、返す言葉がねえけど……」

と前置きした上で、パンクスは一の句を継ぐ。

「神奈の命が危なかつたんだ。

俺の腎臓、一個はもうダチにくれてやつてたから、俺自身がくたばるしかあいつに自然にくれてやる手がなかつたんだ」

突然放たれた脈絡のない言葉に、麻里愛はたじろいだ。

どうしても言葉を結び付けることが出来ない。

彼女は、このパンクスに人殺しの真相を訊いていた。

そして、返つて来た言葉がこれだ。

母親の命と大量殺人、この一つがどう結び付くとこいつのか。
どうにも想像がつかない。

「お母さんと人殺し……、なんの関係があるって言ひの……？」

嫌な予感と、聞きたくない言葉が脳裏をかすめる。

父親は何を言つつもりなのか。

麻里愛がようやつと導き出した最悪な言葉。

この男は、これを言つ気なのだろうか。

パンクスがあの後に続けた言葉。

それは、この言葉だった。

「あいつらを抹殺した上で神奈の命を救う手はこれしか無かつたんだよ……」

麻里愛の心にブリザードに変わって、灼熱の熱風が吹き始める。
自己正当化の極致とも言えるこの言葉。

麻里愛の一番聞きたくなかったこの言葉を聞いてしまった今、彼女
が取るべき行動は一つしかなかった。

右手にペン、左手には、裏が無地の新聞広告。
広告の裏に紋様と、【赤星拓真】、そして、【禁】といつ文字を書
き込み、そして、唱えた。

「この近辺に赤星拓真の思念体が存在することを禁ず……、禁……
と……。

パンクスの顔は瞬く間に歪み、

「ぐおおおおお……」

とのうめき声をあげ暫く悶え苦しんだあと、

「畜生おおお！」

と吐き捨てその場から消えた。

癪に障る父親を追い払う事に成功して1分後、本来尿を出すための穴ではない穴から大量の尿を放つと同時に、麻里愛の膣痙攣は終わりを告げた。

だが、その尿は本来の黄透明な色ではなく、なにやら気味の悪い、どす黒い色に変色している。

下腹部が痛い。

麻里愛はどす黒い尿の主である隆行の意識の回復を待つて、婦人科で検査を受けることに決めた。

次回予告一

麻里愛です（トロト）

なーんか嫌な予感がすんだよねー、子宮取つちやわなきやなんなく
なるよーうな、嫌ーな予感がや……（トロト）

取り敢えずお母さんからあたしを拾つてくれた黒田先生に診でもら
おつとと思つただけど、正直行きたくないなあ……（トロト）

次回「なんで……？」

拓真編 第一部
『責任の取り方』

敵が一體……。

お父さん敵に回したの失敗だったかな（^—^；）

つて、次はお父さんの視点かい！？

以上、麻里愛でした

（^○^）／

……、疑問は抱いていたのだ。
心配もしていた。

それなのに、なぜ確認を怠つてしまつたのだろうか……。

鏡で現世を確認したとき、そこには間違ひ無く、麻里愛と隆行のツーショットが映し出されていたのだ。

にも関わらず、ただの友人関係であると素通りしてしまつたのである。
拓真には、生前から重要なことを軽く見て素通りする癖があつたが、
今回はそれが最悪の結果をもつて、出でてしまつたといつこととなつた。

ルール上、任務失敗と、それをどう收拾するのかを上司である閻魔に報告しなければならない。

「あーあ、やだな……、あいつに失敗の報告したら、ねちねち小うるせえんだよな……」

キンキンに冷たいかき氷を食した後のようにあからさまに顔を歪めながら、拓真は失敗報告を念波によつて送り始める。

『……閻魔の姉ちゃん、聞こえつか？

西の門より広目天だ』

そう前置きして、報告に入る。

上の者からも、下の者からも、閻魔大王ではなくツツコミ大王と呼ばれている女性が現代の閻魔である。

マシンガントークで知られる、古館伊知郎氏が全身全靈を持つて突つ込んでくるようなツツコミの神様を相手に回して、自分の不手際を報告しなければならないことに、そこはかとなく不安な気持ちに陥つてしまつ。

『おい、姉ちゃんよオ、聞こえてんなら返事くれえせや』

さほど時間が経過していなかったわけではない。

それどころか、ほとんど時間は経っていない。

にも関わらず、閻魔に報告しなければならないこと、任務に失敗したこと、そしてなにより、それによって「」の遺児である麻里愛を生み、身体の危機に晒してしまったことが、時間の流れを何倍にも何十倍にも早めてしまう加速装置として、拓真を駆り立っているのだ。

閻魔からの返信は未だ無い。

一癖も二癖もある門番四人を束ねる身なのだから忙しいのは確かだろ？。

だが、束ねている以上は迅速に応答してもらわねば困るのだ。

現世とあの世の境界線、幻影城。

いつ見ても薄気味の悪い空間だった。

吹き荒れる強風、果てしない荒野、そこから見えるものはもや、や、幻影城しか存在しない。

その、西門の番について早一年、これほど返信が遅れたことはないのだが……。

『お姉さま、お姉さま、わたくしの呼び掛けにお答えくださいまし』

丁寧に入つてもおそらくは無駄であろう。

それが解っているだけに、報われないボケになつてしまつだらつ言葉に言い知れない虚しさが込み上げてくる。

待つこと三時間あまり。

漸く御大将からのお返事がやつてきた。

『あ、ごめんねタック。

ちょっと北門のカンナが化かしちゃつたもんでも。』

事後処理に追われてたんだわ』

どうやら、北の門番である神奈も仕事にしつじつたらしく。

北門は、殺害被害者が来る場所だ。

基本的に残してきた者に想いを告げて来をせるだけで済む西門と違って、北門の場合はもともと強い怨念を抱いて死んだ者がやつて来るのだから、対象が怨靈に化けてしまつ確率は格段に高いと言える。

『悪いな、閻魔の姉ちゃん……、俺も化かしちまつたわ……』
度重なる事後処理に申し訳無さが込み上げて来はしたが、ミスは報告しなければならない義務が有るために、どうしても言つておかなければならぬ。

『ああそり……、そうなの……』

いつものツツツミではなく、氣の抜けた返事を返して来る閻魔に対して、うしろめたさのトルネードが吹き荒れた。

『で?

タックはどうしたいの?』

【どうしたいのか】、と訊かれれば、もう答えは決まつていて。それはもう、 $10 \times 10 = 100$ と同じレベルで決まつている。

『なんとかして、天に送りたい』

それしかない。

娘の親友だといつもあるし、自分の不注意によつて怨靈と化してしまつたといつもある。

そしてなにより、四方八方円く収まる大団円を迎えるためには、七海に成仏してもらつしかないのである。

『被害報告お願ひ。

あんたが化けたつて言つてくるつてことは、それなりの被害が出たつてことなんでしょう?』

始まつた。

閻魔必殺のツツツミ攻撃である。

どうやら、手は貸してもらえそうだ。

『娘の下腹、多分子宮が感染症起こした可能性がある。

あと、化ける取っ掛かりになつた娘の彼氏に物的損害が多数』
感染症は気になるが、命に関わるようなものでもないだろう。

隆行の物的損害に至つては、働いて買えば済む話である。

七海にしても、麻里愛はほぼ間違い無く結界を張るだりうし、堂々と見送つて見逃し三振となる打席に立つたピッチャーの「」とく、全く手出しが出来ないだろう。

『俺は事件を途中で投げ出したことはねえんだ。

なんとしても佐島七海を天に還してえ』

それが搖るぎ無い拓真の答え。

そして、彼の信条でもあつた。

暫くの間、ハリケーンのような強風が吹き抜ける音のみが鳴り響く。七海の昇天を妨害したことに対する叱責であるかのようなこの轟音が、時間が止まってしまったような錯覚を覚える。

時間を動かしたのは、閻魔だつた。

『うーん、お願ひだからヤバくなつたらおとなしく、退治する方向で動いてよ？

あんたにはそれが出来る能が有るんだから』

残念ながらそれはきけない。

七海には何の責任もないのだ。

責任を取る必要があるのは、拓真なのである。

『わりいな、それは……、無理だわ。

あと、なんかあつたら手を貸して貰えるか？

それからちょっと、カンナ貸して欲しいんだけど、良いか？』

この問い合わせして、閻魔がこう答える。

『あー、じゃあ、北門に繋ぐから、タックが直接交渉して。

あたし、夫婦喧嘩は食いたくないのよ。

あんた達生前いろいろあつたみたいだしね」と。

久しぶりの、神奈との直接対話だ。

刑務所に五つ子を全て生むという意思を神奈が一方的に告げるために面会に来て以来、20数年振りだ。

この、現世では最後となつた対話も大喧嘩となつたが、それ以来となる今回の対話は前回のように折れる訳にはいかない。

『タク……、事情はだいたいアネゴから聞いたけど、わたし嫌だよ。絶対お断り』

……、もはや対話にもならなかつた。

通信開始即回避である。

『おい、ちょっと待てよー?』

『あんたの声なんて聞きたくも無いの。じゃあ、さいなら』

「なんで……?」

拓真にはもう、九官鳥やオウムのよう、この言葉を繰り返すことしか出来なかつた。

次回予告ーー

増長天よ(^o^) /

誰だよって思った人、手え挙げて！ つて皆かい！ (^—^ ;)

わたしは神奈よ、神奈(^o^) /

タクは大つ嫌いなんだけど、娘の命がかかつてるしねえ…… (^—^ ;)

次回は、わたしとタクとの大バトル(T o T)

なんで元ファインセとこいつも徹底的に解り合えないのかなあ(T o T)

次回「なんで……？」

拓真編 第一部

【親としてすべき事】

人の子が最後まで頼りに出来る存在は、親しか居ない。

悪かったわね！

子にも捨てられるような親で！（ＴｏＴ）（ＴｏＴ）（ＴｏＴ）

以上、増長天でした（ＴｏＴ）

9 拓真編 第一部 『親としてすべきこと』（前書き）

済みません、プライベートが慌ただしく、気が付いたらレッズゾーンに入ってしまってました(トト)

今後このようなことがないように気を付けます

m(ーー)m

拓真の中で、視界ゼロの強烈なブリザードが吹き荒れる。まさか断られるとは思いもしなかったのだ。自分一人の能でどうにかするか、もう一度神奈に頭を下げるか、悩み所である。

『取り敢えず様子でも見てみつか』

左手で長方形を描き、映現鏡を呼び出す。

そこには、旧友である黒田桜子医師の診察を受けている麻里愛の姿が有った。

何やら、長い髪をバサバサに振り乱しながら大口を開けて喚き散らしているようだ。

音声を伝えてこないのがこの鏡最大の欠点なのだが、今回は何があつたのか手に取るように解る。

ほぼ間違ひ無く感染症にかかつた子宮を切除しなければならないと いつ告知を受けたのだろう。

『完璧に……嫌われるな』
もはや、決定打だった。

次いで被写体を七海に切り替える。

高い石垣とブロック塀で構成されたミラーの無い丁字路。いつぞや七海と共に訪れた、死の交差点だった。

その突き当たり、自動車が七海をひき潰した事故現場に一人佇んでいた。

間違い無く怒っている。

塀から覗く樹樹は微動だにしていないにも関わらず七海の髪がコラコラと揺らめいていた。

明らかに何かをやらかす雰囲気をひしひしとかもし出している七海に対し、まずコンタクトを試みる。

『七海、広目天だけど』

「ブツン……。」

一方的に回線を遮断されてしまった。

声も聞きたくないということらしい。

あくまでも自力解決を望むなら、もはや消滅させるしかないというレベルに到達していた。

『しゃーねーな、やるか……』

何かをやらかされてからでは遅い。

『力ンナ、頼むから話を聞いてくれ……。』

今、麻里愛がやべえんだよ、俺とおまえの娘だよ。

俺もう完璧に嫌われてて、結界張られて閉め出されたんだ。おまえに手え貸してもらいてえんだよ』

自分のミスによって招いた緊急事態である。

今更頼めた義理でもないのだが、丸く収めるためには、どうしても第三者の介入を必要としていた。

『あのね、汚れたお尻人前で捲つたって、普通はキッタナーイって言われるだけで絶対に拭いてなんてもらえないんだよ。なんでわたしに向かつて捲るのよ』

言われた通りだつた。

確かに頼める義理ではない。

だが、神奈としても、麻里愛に対して母親としての責任を放棄した罪はある筈だ。

産み落として直ぐに他界するというのは、産まってきた側にとつては産まれて直ぐ捨てられたも同然なのである。

いくら事後を親友夫婦に遺言で託していたとはいえ、許されることはない。

『確かに俺はケツ拭いてねえつてことも、それをおまえに捲つてることも認めるよ。

けどよ、おまえだつてまだ拭いてねえんじゃねえのか？

七海は俺がどうにかすつから、お互いちやんと拭いちゃまおつぜ』
『ぱづ』
麻里愛含む五人の子供達に何もしてやれなかつた責任を一番感じているのは、多分神奈だらう。

周りの者全員から無理だ、堕ろせと反対されたのを聞かずに、かたくなに五つ子を産み切つた結果がこのざまなのである。

腎臓に死の病を患つてゐる体でそんなことをすればひとたまりもないことぐらには、自分で解つていた筈だ。

『解つたよ。

わたしの担当は、麻里愛だけでいいんだね？』
『なるほど、意地でも連携しないつもりらしい。

だからこそ敢えて【だけ】と仕事の範囲を限定してきたのだらう。
それでもいい。

神奈の力を借りられるのなら、この条件でも交渉は成功と言える。

9 拓真編 第一部 「親とじてやべれり」(後編)

9

拓真編 第一部

『親とじてやべれり』(後編)

次回予告一

七海です (- - - #)

マジ頭きた (- - - #)

わたし死んでまだ一日も経ってないんだよー?~

なのに何あいつが、すつ裸で乳縁り合つてんのを (- - - #) (-

ー - #) (- - - #)

殺す!

絶対殺す!

次回「なんで……？」

七海編 第四部

『天に還るために』

狙つた獲物は、絶対に逃さん！

ああ！？

そんな事しちゃあの世に逝けないだあ！？

いいんだよ、わたし怨霊でも成仏出来る手を知つてんだから！

以上、七海でした（――#）

鬱蒼と樹が生い茂る庭を取り囲む、ブロック坪。正面に佇む、高い石垣。そのすぐ側には電柱があり、【注意！ 死亡事故多発】といつ立て札がかかっている。

死の交差点。

そこは、死の名所であるだけに地縛霊の溜り場となつてゐる。その数は実に、四人にも上つた。元々多いだらうことは予測してはいたが、実際に目の当たりにすると、いかにここで多くの自動車が人の命を喰らい潰してきたかが手に取るようになる。

今日から、七海もこの地縛霊達の仲間となる。そのためには、忌まわしい交差点に舞い戻つてきたのである。

怨霊と化しても成仏できる、つまり、あの城を完全にスルーして、一気にあの世へと逝くことが出来る奥の手を実行するにはどうしてもここに来る必要があつたのだ。

同じ死に方をした者を七人、更に、人柱を一人用意すれば儀式は完了、いわゆる七人御先である。残り三人。七海の狙いは当然麻里愛と隆行を巻き込むこと。しかも、なるだけ麻里愛を人柱にしたい。あの女が隆行をたぶらかしたに決まっているのだ。

そのために七海がまずしなければならないことは、こここの地縛霊達を仲間に引き込むことである。七人御先を成功させる最大のポイントは、志を同じくすることなのだ。スポーツの団体競技で全員が勝ちたいと思わなければ勝てないので同じようなものである。

最初のターゲットを七海がひき潰された石垣の直ぐ脇で蹲つて震え続けている、ぱつと見て十代後半ぐらいの茶髪の女の子に絞つて

接触を試みた。

「こんにちは。どうしたの？」

とにかく彼女には、事故の危険はもう去ったのだということを理解してもらわなければならない。そして、それによつて自分がもう、生きた人間ではなくなつたのだといふことも、受け入れてもらわなければならなかつた。

女の子はなんの反応も示さず、只只打ち震えているだけ。どうにも長期戦に突入しそうな気配が満々だ。

「あのさ、もう車、行っちゃつたよ。もう車いなから、顔上げても大丈夫だよ」

まず話を聞いてもらえなければ話にもならない。ここは、どうにかおちつかせることに専念しなければ。それにしても……、怯え方が異常だ。七海自身事故間際には、恐怖で身動きがとれなくなつてしまつたが、せいぜいその程度である。

この様な体勢では、運転手の顔も確認できないのではないだろうか。いや、意図的に顔を見るのを避けようとすらしている体勢であると言える。

……、もしや……。

「あなた、事故死じやなくて誰かにここで、普通に殺されたわね？」
確信は無かつたが、もしこれが正解だつたなら、彼女を御先に引き込むことが出来ず、余計な犠を一人増やしてしまわなければならなくなる。できることなら、否定してほしい。外れていてほしい。只でさえ、余計な犠を一人作らなければならぬことが確定していて、気分が滅入つているのに。

周りの木木が、風にざわめいている。七海の気持もまた、それに比例して俄にざわめき立ち始めた。七人御先の成否は、もはやこの少女一人にかかっていた。

10 七海編第四部 『天に還るため』（後書き）

次回予告…！

七海です（< o >）／

よつやつと女の子とのコントラクトに成功すんだけどか、ここに今まで
奴らの手が延びてきちゃったのよ、つたくムカつく（・・・・#）

次回

「なんで……？」

七海編 第五部

『計画破綻？』

びつひつ世の中ついていつも思に通りに進まんのかね……（トロト）

ニヤニヤ、まだ儲かるやつがいるのかな？ 世になんて逝けないわね
○(>・<)○

以上、七海でした(^o^) -

元々人数が足りない。そんなことは初めから判っていた。この状況で出来るだけ要らん犠牲は避けたい、いひ願うのは、調子が良すぎるのだろうか。

蹲つて震える、茶髪少女。この少女はどうも殺人被害者であるらしいのだ。

モタモタしていると、奴が結界を張りに来る。奴が来る前にここにいる四人とかたをつけなければならぬ。

「ひかれる！」

少女からのファーストコンタクトはこの言葉だった。気持が焦つて読み違えたのか、びつやら彼女はちゃんと、事故で亡くなつてくれていたらしい。

「お兄ちゃんが……、あたしをひき殺してお母さんの遺産を独り占めする氣らしいの！」

……、微妙だ。実に微妙だ。事故で亡くなつたのは確かにようだ。だがそこには明確な殺意が存在する。殺意が認められる以上、これは、殺人事件なのである。

「はい、ごめんね、ちょっとどいてね」

突然目の前に一人の大柄な靈体があらわれた。長い髪を頭のてっぺんから一本結わえた物珍しいツインテイル、200センチを超えているのではないかと思われる背丈、それでいて、恋愛シミュレー ショングームからでも抜け出してきたかのよつた顔立ち。忘れる筈もない。麻里愛の母親、岩国神奈だ。憎らしい程に麻里愛にそつくりである。

神奈は何やら少女と話しこんでいる。少女の表情が瞬く間に晴れやかになつていった。

そこはかとない嫌な予感。少女がこの女に導かれて、成仏してし

まつのではないかという酷く嫌な予感がよぎる。

【計画破綻】

要らない犠牲者の増加を余儀なくされてしまうのだろうか。

少女はついに、神奈と手を取り合つて何処かへと消えてしまった。

【成仏】。必要な犠牲者の数は、一人。

不幸は連續して襲いかかる。今度は事故死者担当である広目天が他の連中を拐いに来たのである。

「よう、久し振りだなお前ら」

陽気な素振りと妖気な笑顔で言葉を投げ掛けてくる。どんなに陽気に振る舞つても、どこか、ドス黒い雰囲気があるのは相変わらずのようだ。

七海の髪が逆立つ。これ以上御前のメンバーを減らされではたまらない。

「どうだ、そろそろ暇になつたろ？ あの世に逝きたくなつたやつ、いつでも連れてくぞ」

先手を打たなければ……。知的活動を嘗んでいる以上、どうしても負けるわけにはいかない戦いにもつれ込むことがある。今回もそのうちの一つであるだろう。【先手必勝】この戦いはルールというレールが敷かれているスポーツではない。ルールが存在しない戦いにおいての先手は、まさに必勝法なのである。

「あのね、あいつに付いてつたら、あいつみたいに働き詰になつちやうんだよ！？ みんな、死んだ後でまで働くなんて、やじやないの！？」

そう、七人御前としてあの世へと渡れば、これはもう、入国手続きをせずに不法入国するようなものである。いくらあの世といえども、そんな連中までは管理しきれないだろう。世の中悪が栄えた例ではないと言うが、侵略者が世界に君臨している現状を見るに、必

ずしも栄えないとは言い切れない。つまり、【勝てば富軍】なのである。

それに対しても広目天は、

「七海……、おまえ、不法入国だと認めていながらなんのペナルティーもねえと思つてんのかよ」

と切り返してきた。なぜか考えていることが読まれている。もしかするとその手の能力があるのかもしれない。しかもなにやら、隠し球を持つていろいろな雰囲気が満々だ。切り返す、これしか手は無さそうだ。

「大丈夫。生きた地球人より死んだ日本人の方が数が多いんだから。絶対にバレやしないって！」

とにかく管理されなければ問題は無いことを強調しておく。管理されされなければ、法律の対象の外に居ることになるのだ。

「おまえ、全くあの世のシステム理解してねえのな」

確かに知らない。人間が死ぬ回数は一回こつきりなのだから、知つていてる訳がない。借りて来た猫の様に押し黙つている七海の様子を察したのか、こことばかりに広目天がたたみかけてくる。

「正直、出来るさ。不法入国は出来るんだよ。でもな、あの世だって地獄なんだぜ？」

あの世が地獄。地獄もちゃんと存在しているにも関わらず、地獄。天国や極楽浄土なるものなど、存在しないと言うことか。

思考の狭間に、またしても広目天の妨害工作が割り込んできた。

「一言でまとめりや、働き地獄だ。そしてそれは、どんな状況で逝つたとしても変わらねえ。ウロウロしてゐるのを見付かつたら、必ず手伝いに駆り出される」

要するに、否応無く仕事しなければならないと言つことなのだろうか。

「なに言つてんのよ、みんなよく考えてみな？ 手伝うつてことは、強制じや無いんだから、そんな要請は断つちゃやいいじゃん」

これが一番妥当な切り返しだろう。生きた人間が働くねばならな

いのは、食費や家賃を確保するためである。靈体は、食事などせずとも死ぬことはないのだから、働くことになんのメリットも無い。この思考にも、広目天はつけ込んできた。この男、余程人の挙げ脚を取るのがお好きらしい。

「靈体にだつて死はあるんだぜ。ただ、誰も死とは言わねえだけだ。靈体が死ねば、その存在自体が消えて無くなる。」

広目天は、突然脈絡の無い話を始めた。確かに食わなくて死はない、七海はそう思いはしていたが、議題は決してそこではないのだ。この切り返しは明らかにベクトルがずれている。

「あはははっ！ なにあんた、この勝負投げちゃうわけ？ なにいきなり言つに事欠いて訳の判らんこと言い出すのよ」

『勝つた！』

正直そう思つた。これは、本当に言つに事欠いて口をついた、出

任せ氣味の苦肉の策なのだと。

だが、そうではなかつたらしい。決してそうではなかつたのだ。

11 七海編第五部 『計画破綻?』（後書き）

次回予告…！

広田天だ（<○>）／

会つた時から思つてたんだけど、七海つてほんとおめでたい女だよ
な……（<—^・）

まあ死んだことねえやつがあの世のシステムを知らんのはある意味
しゃーねえとは思つけど
(<—^・)

あの麻里愛殺し計画はなんとか阻止できそつだな
○(< - >)○

次回 「なんで……？」

七海編 第六部

『完全なる破綻』

今は、今出来ることに全力を尽すだけだ。(< - >)○

それでも報われねえのがこの世のシステムだ……なんて突っ込みは無しだぜ？（^_^;）

以上、広目天だ（^○^）／

八人まで、二人足りない。しかも、残る三人を広目天が纏めて成仏させにしゃしゃり出てきた。このままでは、完璧に計画倒れになつてしまつ。

あの世へと入国手続きをせずに逝くことが出来る邪法【七人御前】。死亡事故多発地帯には、必ずといつていいほど存在している怨霊の集合体だ。

只でさえ狭い視界を更に狭めてくれる、あまり手入れの行き届いていないはた迷惑な庭木がざわざわとざわめきだつていて。何かの非常警報であるかのよつて、風も無いのにざわざわと激しく泣き喚いていた。

そんな中勃発してしまつた広目天との論争に、七海はどうにか勝てそうだといふ手応えを感じ取つていて。広目天が明らかに論点のズレている反論を、苦し紛れに繰り出してきたのである。

「あーそう、お化けも死んじやうの一。へえ、怖い。ああ怖い怖い。あたしも気をつけなきや」

すっかり勝つた気になつて馬鹿にしきつた返事を返してゐる。態度には出していいものの、眉間にシワを寄せ、唇の両端を極端に吊り上げた、般若の如き表情からも勝ち誇つてゐることが窺える。

「ふん、勝つた気になつてご満悦かよ、おめでたいこつたな」

言い返す広目天もまた、鼻で笑う余裕を見せる勝ち誇つた物言いで反論を繰り出しあげた。

「あの世は、サービスしねえ。徹底的に不法入国者には、公共サービスを提供しねえのよ」

七海の眉が、ピクリと反応する。【公共サービス】。既に死んでいる者に対して有効なサービスなど、もはや【転生】【黄泉返り】【権力】の三つぐらいしか思い浮かばないので。

「正解だ。あの世が提供するサービスは【功労点の配布】だ。これが指定量まで貯まれば転生できるし、元旦から七月末までの間で稼いだ点数の多い20体が、盆の期間に誰からの干渉も受けない完全オフをもらう権利を得る」

ここまでは問題無い。七海の吊り上がった口元は、まだ彼女に精神的余裕が残っていることを示している。

「おまえらにとつての問題は、こつからだぞ」

ここで広目天の口元も吊り上がった。七海が微かに覚えた不安に反応したのか、ここに来てさらに増して来た広目天の妖しさに反応したのか、思うがままに育ち放題の庭木が風も無いのに激しく揺れている。

「七海の言つた通り、生きてる地球人より死んでる日本人の方が多いからな。言うまでもなくあの世は人口過密だ」

それはそうだろう。そんなことは、言われなくても想像が付く。「だから、ここ数年あの世はなあ、不法入国者の締め出しにかかるんだよ。さつき上げたオフを競い合つ半年プラス一ヶ月の間に、一点も稼げてないグータラ野郎は纏めて消滅してもらうことになったのさ」

七海の顔から始めて余裕の色が消し飛んだ。どうやら広目天の言わんとすることを、ほぼ完璧に把握出来たらしい。

「御名答。七海、おまえの察した通り御前はサービス受けらんねえんだから、必然的に8月1日が命日つてことになんのよ」

漸く広目天による、ロールプレイングゲームの始めに出て来る操作説明のような、無駄に長いあの世の解説は終了を迎えた。

そう、

七海外の全員の成仏という、最悪の結果を以つて。

「なんで……」

死の交差点に一人ポツンと、へたり込むような体勢で取り残され

てしまつた七海は、涙を流しながらその言葉を繰り返していた。

佐島七海として一度も死んだことが無かつたといつ至極当たり前なことに起因する、致命的な情報の欠落。その理不尽極まる敗因に、七海は只々座つて泣いていることしか出来ずにいた。

12 七海編第六部『完全なる破綻』（後書き）

突然で申し訳ありません、今回で、【次回予告】止めようと思います。（――）

ここ数回、スランプやら本職の忙しさやらでやたら更新が不定期になってしまっているため、意味をなさなくなってしまっているような気がするんです（トロト）

重ね重ね、不定期更新申し訳ありません（――）

拓真と約束を取り交わしたとは言え、神奈はまだ動く気にはなれなかつた。自分にそんな意志は無かつたにしろ、結果的に息子一人、娘三人を産んだそばから捨ててしまつたのである。とても会わせる顔が無い。

「後悔しないために産んだのに……。産まなきや良かつたのかな」そんな考えさえ持つてしまつ。拭い切ることのできない罪悪感。産めば死ぬ、それが解り切つてゐる状況での出産。そこから芽生えた後ろめたさは今や大木へと成長してゐた。

今、一体の少女を無事に成仏させた後、自分が受付を任せられる幻影城北門に帰還して今後の身の振り方について考えている。麻里愛が既に死んでしまつてゐたならまだ手の打ちようもあるが、生きた人間である以上本来あの世はノータッチの姿勢を貫かねばならないのだ。生者の運命を死者が変えてしまつ、今も昔もそれは現世とあの世の狭間における最大の禁忌なのである。

もしこの騒ぎで、麻里愛が死ぬ運命にあつたとしたら。それなのに、それを神奈が助けてしまつたとしたら。紛れも無くこの禁忌に触れてしまつ」ととなる。その先に待つてゐるものは……、

『消滅』

自分の存在が果てる、その恐怖を実感しはじめたとき、元々暗い闇に包まれていた北門周辺の景色は更に深い闇へと沈んでしまつた。

北門広場。広場といつも氣楽な響きにはあまりにも似つかわしくない、どす黒い闇。そして、荒んだ景色。幻影城の屋外の景色は今自分が置かれている心情を映し出すといわれているが、今の今までこれほど荒んで見えたことは無かつた。

現世での麻里愛の様子を確認するため、映し世の鏡を作り出す。そこに映り込んだ麻里愛は手術台に横たわり、下腹部に大きな切れ込みを入れられていた。

白衣を纏う女の手には見るも無残な悍ましい色彩の肉塊が乗っている。形状で辛うじてそれと判る物体、子宮。一目で腐敗していると判断できた。

「子供、産めなくなつちゃつたんだ……」

かつて神奈が味わつた、産めば死ぬという辛さとは全く逆の辛さ、苦しみ。それがどれほどの精神的苦痛を伴つもののかは、現世を女として生きた神奈には痛いほど良く解る。

たとえ亡くなつた友人への礼を欠いたツケであるとはいえ、これがあまりにも酷い仕打ちだ。

神奈は決る。助けよう、支えになろうと。

北門広場の風景も、いくらか明るさを取り戻している。麻里愛を支えていこうと決めたことで、いくらか気持ちが晴れたのだろう。まずはどう接触するか。この時に与えるファーストインパクトによって、ミッションの成否が左右されるのだ。間違つても拓真のよう、結界によって締め出されるような愚を起こしてはならない。

今はまだ早い。もう少し様子を見なければ、取り入る取つ掛かりが少なすぎた。

「タクはどうする気なのかな」

あくまでも主導権は拓真である。これは彼が起こした騒ぎであり、神奈はその尻拭いのために駆り出されてしまつただけなのだ。先刻は勢いで連携する気はないと言い張つてしまつたが、拓真の動きや狙いが解らなければ、神奈もまた身動きが取りずらいのだというこ

とに、今やつと氣付くことができた。

鏡の対象を麻里愛から拓真へと切り替えて、確認する。何やら物騒な注意看板が並ぶ、見通しの悪い丁字路で、ショートカットの女性と揉めているようだ。

あれが拓真が怨靈に化かしてしまった今回の対象なのだろうか。現場にはその二体以外に更に三体の靈も存在している。

それにも、この全員に見覚えがあるのはなぜだらう。このミッショーンにおいて、そんなことはどうだつていいことなのだらうが、どうしても気になつてしまつた。

あのショートカットの女性から、何やらとんでもない怨念を向けられたような記憶があるので。

「あれは確か、どつかの丁字路で……、遺産相続のゴタゴタで轢き殺されちゃつた女の子を……」

ここまで思い返したところで、漸く全てを理解した。今写つている現場がその少女がいた丁字路であること、そして、少女の説得に入る前にあのショートカットの女性が何やら交渉していたことを。

「あの娘が七海つて娘なの？」

間違いなくあの女性は神奈に対して、去り際に強い怨念をぶつけている。今神奈は殺されて死んだ靈を成仏させる仕事をしているが、生前はそれ以上の修羅道を歩んできた。

犯罪者を白日の元に曝す探偵業。そして、ライバルとの蹴落とし合戦を生業とする芸能人。そのどちらもが、常々戦いの日々なのだ。そんな暮らをしてきた神奈が、怨念を他の感情と紛らはれない。

『あれは怨念だ』

神奈はそう結論付け、拓真の様子を見る。どうやら拓真は、七海以外の靈をまとめて成仏させることを狙つたらしい。その狙い通り、ショートカットの七海以外の連中が拓真と共にその場を離れていく。そして拓真は西門前へと移動し、連中を片つ端からあの世へと送つた。

「相変わらずやることが大掛かりだね」

恋人の、いかにも彼らしいやり口を前にして、思わず微笑みが漏れてしまった。

神奈は映し世の鏡で拓真の様子を確認している。拓真は、三体の地縛靈を纏めて成仏させた後、映し世の鏡を作り始める。いつたいどこに繋いでいるのだろうか。もしここに繋いだのなら、この薄ら不気味な景色の中のどこがしかに変化が現れるはずなのだ。

薄暗く覆いかぶさる雲の海には、何の変化も無い。

ジワジワと息吹の色が芽吹き始めた雑木林にも、特段変化はない。カラカラに渴いて、干からびてしまっている大地……、には、何やら微妙に歪んでモヤモヤと蠢いている地点があった。どうやら間違い無い。拓真の鏡は、ここに繋がっているらしい。神奈が余りにもあからさまに連携の意志が無いことを表明したため、隠れてこつそり運動しようともいうのだろう。

『ちょっとあんたねえ、いくらわたしに連携する気はねえって言われたからって、陰でこそこそやってんじゃねーわよー。もつとビシツとしなさいよ、キンタマ引っ付いてんでしょ！？』

どきつい激を飛ばして連携してやつても構わんとの意志を示す。これを受け取れるかどうかは拓真次第だ。

返事を待つ。昔からかけられた言葉の意味を自分なりにじっくり噛み砕いてから返事をする節のある拓真だ。おそらく直ぐに返事は来ないだろう。

神奈はそう踏んでいたが、意外にもあっさりと返事が来た。

『ワリイ、恩に着るよ』

理解したらしい。昔より拓真の推理に切れが増していくことに、師である神奈はひつそりと喜んでいた。

雲の切れ目から日の光が落ちはじめた北門広場から、幻影城北門へと引き返した神奈は門前の階段に座り込む。

久々に見る太陽の輝きは、とても晴れやかな気分にしてくれる。

『で、わたしはどう動けばいいの。どうにも麻里愛に取り付く島がないんだけどさ?』

実際に、今動くのは良くない気がした。少なくとも好かれではない筈なのだ。精神的にかなり参っている時期に、余り好きではない者の訪問を受ける。普通なら、にべもなく追い返して結界を張ってしまうだろう。

これには拓真も返答に困っているようだ。両親ともに嫌われている、その有り得ない程に厳しい現実の壁が、一体の前に大きく立ちはだかってしまった。

『あの背後靈にでも執り成してもらうか……』

背後靈とはまた、ぞつとしない話だが、いつたい何が取り憑いているというのだろう。そして、自分の娘にそんな得体の知れない者が憑依しているというのに、この男はいったい何をしているのだろうか。

『なんなわけ？ その背後靈って』

『たぶん守護靈だと思うんだけど……、怨靈締め出しの結界に締め出されそうになつたんだよな、そいつ』

拓真の結界に引つ掛かる。それは、その時点で対象がなんがしかの形での怨靈であることを示している。出来ることならそのような危険な靈体とは縁を切つてもらいたいものだが。

取り敢えず、再度映し世の鏡に麻里愛の姿を映してみる。そこには、ベッドを殴り付けて悔しがる彼女の姿があつた。その直ぐ横には、見覚えのある男が付き添つている。確か、麻里愛が幼い頃、よく一緒になつて遊んでいた男の子……、【隆行くん】だつただろうか。

『そつか、あの二人付き合つてたんだ』

懐かしい顔を見て少しホッとする。そこで少し、気になることに気付いた。知つていい。確かに知つていいのだ、あの七海という女性を神奈は間違ひ無く知つていいのである。

いつもこの一人と一緒につるんでいた女の子。面差しが一致する。

これはもう、確定だわ。

神奈は、北門守備部隊の総長である。勿論、それなりの数の部下を任せていた。口に、輪にした親指と人差し指をくわえて、一息に息を吹き出す。

北の守護神増長天様の唇が激しくふるえ、『ピィー』という甲高い音を発すると同時に、彼女の下に入っている低級靈達がバタバタと集まつてくる。

拓真と同じ轍は踏まない。自分が駄目なら、自分の息がかかつた誰かに托すことにしよう。

集まつた部下達に映し世の鏡を見せて、指示を出す。

『少しの間、この女の子を悪靈からガードしてもらいたいの。誰か頼まれてくれる人居る?』

十体居るうち、四人が名乗りを上げた。こうして、麻里愛守備隊側は全ての準備を整えたのである。後は、拓真が七海を成仏させると消滅させるのを待つのみだ。

神奈によつて急遽結成された【麻里愛守備隊】。隊長に任命されたのは、未だ神格は持つていらないものの中級靈に値する幸長雅章。彼は、自分を殺した犯人を神奈に捕まえてもらつたといつ経緯を持つ。

『よつしゃ、カン姐のためだ！ 一肌脱ぐぞ、おまえら！』

雅章の言つおまえら、他の三人もまた、神奈によつて怨みの鎖を断ち切つもらつた者ばかりだ。否が応にもこの場が盛り上がりってきた。

『勿論つすよアーニキ！ あんなに綺麗な麻里愛ちゃんをこんな歳で死なせやしません！』

中には神奈のためではなく、麻里愛自身に興味を持つている者も居るようだが、今回の件においてはそのほうがプラスに働いてくれることも確かである。取り敢えずは心配なさそうだ。

神奈は頭頂部から垂れた左側の尻尾を左手で揉みくぢやにしながら、必要以上にやる気になつている守備隊に、

『あのねえ……。気合い入つてのはありがたいけど、変に突つ走つて空回りしないでよ？』

と、取り敢えず釘を刺しておぐ。やる気だけが先走つて拓真のように締め出されてしまつては、どうにもならないのだ。とはいへ、空模様がまだ穏やかな所を見ると、たゞ一氣にしてもないようだが。

『解つてますよ姐御。で？ 姐御はどういう戦術を考えてるんで？』

『ごめん、丸投げさせもらつわ』

神奈はとても無責任な答えを返す。とはいへ、勿論そこには自分が絡むと失敗する可能性が高いという打算があるのだが。

『了解。じゃあ、早速作戦立ててきますわ』

そうと決まれば完全に神奈を現場から締め出すつもりのよつだ。

今まで晴れていた空が、またしても曇天模様に変わった。葉が繁り、翠の森となつた木々が、再度吹き荒れ始めた強風にザワザワと騒ぎ立てている。

『お願いだからしくじつたりしないでよ?』

どうしても信用できない気持ちは、なおも北門広場に嵐を巻き起こしている。神奈の心配をよそに、麻里愛守備隊は作戦会議へと散つていった。

麻里愛守備隊はただ今作戦会議中だ。自分らが神奈の命によつてサポートしに来たのだということは、なにがあつても隠し通さねばならない。幸長隊長は、ひとつひとつ順序立てて決定していく慎重策を提唱し、全員がそれに従う形で会議自体のベクトルが決定する。最初の行動、それは言つまでもなく、麻里愛との接触方法である。『まず、姿を見せるか、極秘裏に護衛するか、どちらがいいと思う』『こゝでしごじると全てが水泡に帰す。協議の中でも、一番時間をかけねばならない議題だろ?』

『あたしは出ないほうがいいと思つたがね。へんに出てつたらヤバいのと勘違いされ兼ねないし』

江戸時代からずつと増長天配下であるらじしい壁長千鶴が妥当な意見を述べながら、日本髪を解いてツインテイルに結い直す。お固い雰囲気の有つた佇まいが、みるとみる今時の若者へと豹変した。

『相変わらずちーちゃんは髪だけでガラツと変わっちゃうねえ。で、他は?』

幸長は千鶴に感嘆しつつ、リーゼント『氣味のオールバックを他のメンバーへと向ける。

『とがチンはどうよ?』

そして、富樫達人へと話題を振った。

『正直、隠れても無駄だと思つすけどね。相手が全く零感だつてんならまだしも、モロ見えちゃう訳でしょ? こそこそ付け回してることのほうがよっぽど疑いを招くと思つすけど?』

話題を振られた達人は、毛先を弄びまくつた黄色いツンツンのパンクヘアを手持ち無沙汰気味に更に弄びながら、倦怠感漲る口調で適当に聞き流しますという雰囲気を満々に漂わせる答えを返す。『TAKUさんとKANNAさんの娘で、しかもあんなに綺麗な麻里愛ちゃんなんだから、言われてるほど頭悪くもないと思つんすけど?』

典型的なパンクスであるためか、ミコージシャンだつた拓真と神奈を知つていいようだ。そして、麻里愛が美女であることもまた事実である。が。

『広目天と姐御の娘だし、確かに美女だ。それは認めるけどな、どう考へても関係ねえだろ! 全く!』

言つてることは正論なのだが、どうしてもその根拠が気に入らない。少し感情的な対応となつてしまつた。

『つたくしゃーねーなあ。キヤノン、おまえはどうよ?』

微妙な苦笑いを浮かべながら、真向かいに陣取る坊主頭に話を振る。本名は瀬間高敏。高校時代拓真と並び賞されていた超高校級右腕投手だったが、最後の夏を前にその能力を嫉んでいたチームメイトに殺害されてしまつたといういきさつを持つ。勿論彼も神奈に犯人を捕まえてもらい、それによつて成仏している。

『マーさんつて確か十兄弟の末っ子だつたよな? なら、兄弟の誰かの守護霊だつて名乗つときやいんじやね?』

『要するにキヤノンも出たほうがいいつて考えなんだな?』

雅章自身も隠れ通すのは無理だと見ていた。陰陽師赤星拓真の遺

伝子を色濃く受け継ぎ、しかもその除霊能力を直伝された、いわゆる【免許階伝】の存在である。どう足搔いても発見されずに張り付いていることなど出来る筈が無い。

『三対一だけじゃ、わーちゃん妥協できるか?』
『出るつてんなら出してもこいナゾれ……。あたしゃ嘘つき通す」とのほうが難しいと思つたどね』

千鶴の意志変更によって、守備隊の方針は【姿を晒す】方向に決定された。そして会議は次の議題へと進んでいく。

登場人物（？）がかなり増えてきたので、纏めてみました（^ ^）

かどぐら まりあ
門倉麻里愛

かどぐら まりあ
通称【まーちゃん】

本編主人公。とあるアクシデントにより、佐野勇氣という背後靈を飼っている。

かんばやし たかゆき
神林隆行

かんばやし たかゆき
通称【タツキー】

婚約者だった佐島七海が事故死して三日と経っていないにも拘わらず、麻里愛と乳くり合っている現場を七海に押さえられ、麻里愛共々祟られる羽目になってしまった。

あかほし たくま
赤星拓真

あかほし たくま
通称【タク、タック、TAKU】

あの世への入口【幻影城西門】の受付及び、事故死者の水先案内人【広目天】。

事故死してやつて來た七海を、手違いで怨靈に化かしてしまった犯人。生前婚約者だった神奈と共に、七海成仏作戦を展開している。麻里愛の実父。

いわくに かんな
岩国神奈

いわくに かんな
通称【カン姐、KANNA】

【幻影城北門】受付及び、殺人被害者担当【増長天】。

元婚約者の拓真から、麻里愛が祟られてるから助けてやつてほしいと泣き付かれ、やむなく本件に首を突っ込んでしまった。麻里愛

の実母。ちなみに、両親共に麻里愛からは嫌われている。

佐島七海

さじま ななみ

通称【ナナ】

地元で評判の死亡事故多発丁字路で、一時停止不履行により亡くなってしまった。

拓真の判断ミスにより、怨霊と化してしまつ。

神奈によつて結成された麻里愛守備隊。その大まかな方針は、彼女の守備隊であると名乗り出ることに決定された。続く議題は、どういう手段で怨靈との接觸を絶つかだ。

『結界張るか、闘つて追つ払うか』

戦術はいろいろあるだろうが、基本的にはこの二タイプに分類されることになるだろう。

『ちーちゃん』

『あたしやろくな結界張れないし。暴れることなら誰にも負けないけどね』

確かに千鶴は術の素養より格闘の素養が秀でている。雅章自身、正拳突きの寸止めを顔面に受け、意識を飛ばしたことがあった。

『おまえの体術は殺人的だからな』

彼にはもはや、苦笑いを浮かべることしか出来なかつた。

このメンバーならおそらくは闘う流れになるだろう。個人的には結界を張りたいと考えているのだが、民主主義とは数の暴力なのである。それもしかたの無いこと。雅章は、半ば諦めている。それほどこのメンバーには術の素養が無いのだ。

『どがチンも闘いてえだろ』

もはや聞かなくて解つてはいる。四人の中で最も喧嘩つ早い男なのだ。基本的には【おバカ】なのだが、喧嘩に関する戦術の立て方にはやたら長けていて、この四人による喧嘩バトルロワイアルがあれば絶対にこの富樫達人が生き残ると断言できるほどの知力を發揮する。もしかすると思うほど馬鹿ではないのかも知れない。

『結界が一番無難だとは思うんすけどね。まあ、TAKUさんが諦めたぐらいなんだから、よっぽど無理な事情があつたつてことなんでしょうね』

雅章は、無言で目を見開いている。そして、顎が外れたかの如く

大口を開けていた。

まさかこんなしつかりした理由を述べて来ようとは。

『なんすかその田……。クイズにちゃんと答えた○ザ○ヌ見るよつ
な目で見ないでくださいよ』

確かにヘキサゴンで○・ι○○○○や○ザ○ヌが一撃で正解したの
を見ると、こんな顔になるかもしない。

『まあ、取り敢えずは闘うしかないっしょ?』

納得いかない顔をしながらも、達人はこう締め括った。

『キヤノンは?』

『野球一筋十年の体育会系だぞ? 結界なんて七面倒なことやって
られつかよ』

時々、よくこれで野球で大成できたなと思うことがある。本来野
球とは、計算のスポーツだ。どこに投げるどどういうスイングをし
てくるのか、その結果、どういう当たりが飛ぶのか、その当たりを
ヒットにさせないためには、ソフトをどう移動させねばならないの
か。ランナーが居ない状態で一球投げる間にも、これだけのことを
計算しなければならない。その状況でランナーが居るとなると、更
に厄介な計算が必要となつて来るのだ。

彼の場合、元々能力が高かつたのだろうが、それだけではかなり
早い段階で頭打ちしていただろう。言い方が悪いがプロになる前に
野球人生が終わつたのは彼にとって良かつたことなのかもしない。

多数決により、結界は張らずという方向に確定した。

【姿を現しつつも結界は張らず】

一見して無理難題とも思えるこの条件の元に、麻里愛護衛作戦が
展開されるのである。

雅章は一呼吸置いて、麻里愛に接触するつもりだ。業務報告もいちいちはしない。神奈のことである。黙っていても映し世の鏡で監視するだらうことは解つていいのだ。

本来なら、もっと任せてほしいところなのだが、それはもう、人格であるとして諦めている。

取り敢えず、接触する取つ掛かりを見つけなければならぬ。麻里愛とはなんの関わりも無い雅章にとつては、まさに雲を掴むような話であつたが、その点においては一方的に片思いしている達人が見つけてくれるかもしれない。

ただ、問題なのは、映し世の鏡を作ることが出来ないということなのだ。雅章だけではなく、他の連中も纏めて作れないのだ。

北門広場の僻地。本当にとんでもなく一番外れの場所。そんな郊外での作戦会議は、幻影城側とその北側との天気を、境界線がはつきりと判るほど一一つに分けている。

城付近は重荷を下ろした神奈の晴れやかな気持ちを反映した快晴。そして、城から離れるにつれて、徐々に無理難題を吹つ掛けられた雅章が発する曇天へと変わっていった。曇天の主である雅章は、映し世の鏡を調達しようか考えなければならない。

『カン姐か？ 無理だな……。拓真さんか？ それか？』

ぶつぶつと一人ごちる。ぶつちやけた話、あまり関わりたくない相手だつた。いつも不気味な雰囲気を背負つていて、何を企んでいるのか全く得体がしれない。

初対面ではないし、生前も死後も何度か接触したことはあるが、その都度UMAでも相手にしているかのような空恐ろしい感覚に陥

つてしまつてゐるのだ。

『拓真さん、拓真さん、幸長です。麻里愛さんとのことで相談があります』

念波を飛ばしてみる。

『おひ、マチャアキか！ さては神奈から丸投げされたな？ おまえら映現鏡出せるやつ誰も居なかつたよな？』

突然聞き慣れない言葉が出てくる。映現鏡？ よく判らない固有名詞だ。

『おい、しかとかよ……。あ、そつか。おまえらは確か、映し世の鏡つてんだっけか？』

これでやつと映現鏡とやらが何なのか理解するに至つた雅章は、間を置かず本題に切り込む。

『すいません、ちょっと聞き慣れない言葉だったもんで。それなんですよ。ちょっと見せてもらえませんかね？』

『かまーねーけど、ぶっちゃけ難しいぞ、今の麻里愛に接触すんの』赤星拓真が諦める状況。接触を試みるのは雅章らだと解つている上で諦めている状況。余程酷いことになつていいのかも知れない。よりいつそう氣を引き締めて雅章は答えを返す。

『解りました。じゃあ、これからお伺いします』

そして、守備隊員達にも拓真の元へと飛ぶことを伝えた。

人物紹介

幸長雅章
ゆきなが まさあき

通称【マチャアキ、ユッキー】

増長天配下の中級靈。マスターの娘である麻里愛の警護を丸投げされた【麻里愛守備隊】の隊長。

今、雅章は幻影城西門にいる。勿論千鶴や達人、高敏といった連中も一緒だ。

『增長隊麻里愛守備隊、到着です！』

四人を代表して幸長隊長が大声を張り上げる。

『あーはいはい。ちょっと待つとけよ』

拓真の声だ。聞こえる声なら近いのに、その姿がどこにも確認できない。……、と、突然目の前に神々しく輝く金色の発光体が現れた。いわゆるオープである。そしてそれは、徐々に人形を成していく、やや小柄な成人男性の体躯と、ツンツンに逆立てたパンク風の髪型を持つ靈体へと変化していく。

革ジャン皮パンツにじゅらじゅらとチエーンを巻き付け、真っ赤に染めた長髪を真上に逆立てた広目天が、雅章の前に、オープから生まれた。そして彼は、出てくるなり両腕で四角を作り、そのスクエアを映し世の鏡へと変えてくれる。

出来上がった映し世の鏡を覗き込んだ守備隊一同は、ここに来る前に広目天に云われた【ぶつちやけ難しいぞ、今の麻里愛に接触するの】という言葉の意味をいやというほど理解することになる。

『これ……、マジでの麻里愛ちゃんっスか……？』

その画面には、かつて門倉麻里愛であると皆が認識していた筈の女性は映っていなかつたのである。厳密には認識上の彼女とフォルムが一致する女性なのだが。

そこに映っている女性は、ガリガリに痩せこけ、全く手入れされていない髪をボサボサに伸ばした、やつれ果てている麻里愛だったのだ。

その場にいる誰もが啞然としている中、広目天が一言述べる。

『悪いな……』

鏡の中で麻里愛が暴れている。彼女がいる部屋は、破壊され尽くしていた。壁には大小様々な穴が穿たれ、床には破壊された調度品や装飾品が散乱し、そのうえから撒き散らされた食事が被さっていた。

麻里愛が子宮を摘出したということは神奈から聞いていたが、まさかそれからたつたの一日か二日でこんなことになつてしまつとは……。精神が見た目に影響を及ぼすと聞いたことがあるが、おそらくこれがその典型例なのだろう。そんなことを思いながら雅章は取っ掛かりを探していた。

少しだして一人の若い男が部屋の中に入ってきた。小顔の中分けセミロング。頭部の両脇を覆う髪の間から覗く優しげな顔が、心配気に麻里愛を覗き込んでいる。心から心配している人の顔だ。兄弟か彼氏なのだろうか。

なにやら声をかけた途端に発狂したかのように泣き喚き始めた麻里愛によって、部屋からたたき出されてしまった。

『彼氏とかじやねえのかな……』

精神の混乱に付け込んだ、不遜な輩かもしれない……。その可能性を考えておかなくてはならないと判断した雅章に、拓真が助け船を出す。

「あれ、たぶん彼氏だ」

彼氏なのだとしたら、随分あつさり引き下がり過ぎではないのだ

ろうか。いや、もしかすると、相思相愛の相手だからこそ自分が妊娠になってしまったことを実感させたくながっている麻里愛の意志を尊重したということなのだろうか。

『こいつ、彼氏なら上手く抱き込めないっスか?』

達人が、雅章の考えを察したかのような案を出してきた。そうなのだ。上手くこの男を抱き込むことが出来れば、彼の守護霊であるとして接触できる可能性が出てきたのである。

幾らか気分が楽になってきたからなのだろうか、雅章がふと空を見上げた時、どす黒く染まっていた曇天は、薄曇りへと変わった。

『どうする? つてももう、これしか手無いような氣にすっけど』おそらくこれは発言者である雅章以外の者にとつても同じ思いだつたのだろう。誰も反対する者はいない。

だが、麻里愛守備隊に対して何の連帯感も持たないこの男は冷然だった。

『無理だな。麻里愛には、かなり強い守護霊が憑いてる。そいつがたぶん彼氏の守護霊をとつぐに認識してる筈だ』

拓真のツッコミが入ったのである。

『シバきますか……。3発くらい喰らわしどきやいっしょ』

喰らわすとは言つても、拳や蹴りといった物理攻撃ではない。衝撃波や気攻といったいわゆるEXPだ。

実体を持たない靈体には、超常的な力しか通じないし、そういうたたか出來ないのである。そしてその威力はその靈体が宿す負の感情の強さによる。殺人被害者であつたり、殺しの下手人の濡れ衣を着せられ、【市中引き回しの上打ち首獄門】のお沙汰を受けたりと、麻里愛守備隊の連中は負の感情に満ち満ちているのである。靈力には自信があつた。

『あー、たぶんおまえらよか強えぞ、麻里愛の守護霊。あいつ、俺を跳ね退けるプロテクト張つたし』

『一』

四人に驚愕の表情が浮かぶ。この、数多ある神々の中には、一つも、必ず黒い存在感を持つこの赤星拓真の靈力を弾き返す力。それはおそらく、とてつもないものだ。

『懐柔すんなら、まずこの佐野勇氣とか言つやつだな』

拓真のアドバイスが入る。確かにここから切り崩していくには、ならないようだ。

雅章は晴れ渡る空の下、それとは正反対に沈みきつた気分に浸っている。

「ここはもう、世界の間ではなく、現世である。だが、降りてきたにも拘わらず有効な作戦をなにも思い付かずにいたのだ。」

護衛対象である門倉麻里愛の自宅のすぐ傍、今回の騒ぎの発端となつた地、【死の交差点】に降り立ち、必死に考えを巡らせる。自然と行動が荒々しくなってきた。

雅章のすぐ脇にあつた石垣を思い切り蹴り付け、繰り出した蹴りが対象を素通りし、石垣の中に飛び込んでしまつた。雅章は今、靈体は物理攻撃が出来ないという基本的な事すら忘れてしまつほど冷静さを欠いていた。

「落ち着け雅章。カン姐に報告して俺が隊長に代わつてやろうか?」
醜態を曝した雅章に高敏が落ち着いて突つ込む。いつもの光景だ。この二人、年齢差はあるもののほぼ同時に北門に配属された同期であり、出世の足並みもほぼ同じなライバルなのである。

「あーあ、また始まるよ、この二人……」

千鶴が肘から下を水平に広げ、ため息混じりに頭を横に振りながらぼやく。

『カン姐? 悪いんだけどさ、任務開始まで大分時間かかりそうだわ……』

達人が取り敢えずの近況を早速主人である神奈へと報告する。全く以つていつも通りの展開だ。

『なに、またやつちやつたの? あのボケ共』

『いい加減メンバーを変えたほうが良くないつスか? あの二人、一緒にいるのぜつて一ヤベえつて』

『でもねー……、あんたら四人はセットじゃなきゃ意味ないんだよね。感情論抜きにしたら増長隊で最強なんだよ、この組み合わせが』

『まあ……、否定はしないつすけどね……』

否定など出来ない。出来る筈もない。精密機械と呼ばれた制球力を持つピッチャーに喧嘩番長と喧嘩女番長、そして、五年連続でレコード大賞を受賞した戦略眼と実力を持つアーティスト。

状況によつて様々な戦略を展開でき、攻防一体のオールレンジな動きが可能となるのだ。高敏と雅章の不仲さえ無ければほとんど隙の無い組み合わせなのである。

雅章は途方に暮れていた。全くいい案が浮かばない。達人が定時連絡を入れていたらしいカン姐も、『じゃあ後よろしく』との一言のもとに、一方的に通信を切つてしまつたようだ。

「おまえ、脳みそ腐つちまつたか？ まずは何たら勇氣とかいうの落としに行きやいいじゃねえか。結局俺ら、そいつがいるから身動き取れねえんだろ？」

そんなことは解つてゐる。言われるまでもなく雅章にも解つているのだ。だからこそ、慎重になつてゐるのである。赤星拓真ですら充分に得体が知れないといつうのに、それをはねのけた靈力を持つているのだ。もし懐柔にしくじつてバトルに発展した場合、ほぼ間違いなく負けてしまうのである。

作戦初期での敗北は、護衛対象である門倉麻里愛の死を意味する。今の段階での様なのである。失敗が許される状況ではないのだ。またそれは、逆に言えばこの佐野勇氣という壁さえ越えてしまえば、後はもう、楽に作戦を遂行できるのだということにほかならない。ここはどうしても慎重にならなければならぬポイントなのである。

「どう乗り込むか……、それが問題なんだよ。麻里愛がいない状況で佐野勇気とだけ接触しなきゃならんのだろう。背後靈を宿主から引き離すのって、相当てこずるんじゃねえのか」

「ここのだ。これが最大の問題なのである。麻里愛に靈感が無いならまだ手の打ち様もあるが、彼女自身もまた、靈の存在を察知することが出来るから厄介なのである。どうしても麻里愛守備隊は【麻里愛に察知される事なく佐野勇気のみ接触する】といつ無理難題をクリアしなければならなかつた。

護衛対象である門倉麻里愛に気取られる事なく、その守護霊にのみ接触する。今、麻里愛守備隊の四人はそんな無理難題に立ち向かわなければならなかつた。

これはもう、どう考へても無理難題だ。

「なあ雅章、お前の作戦、どう考へても無理だよ。俺がなんたら勇気にブラッショボール喰らわしてやつから、それで逆襲に来たとこをとつ捕まえようや。な？」

案が浮かばずに冷静さを失いつつある雅章に、高敏が代案を提示する。野球で培つた制球力を駆使して勇気の頭部に靈氣弾を喰らわせ、その攻撃に対する反撃に出てきた時を狙つて接触しようというのだ。

「避けられたら終わりだろ！ お前200キロ超える球投げれるのか！？ モーション起こしてから3秒以内に投げれるのか！？」

「別に当てる必要ねえだろ！ そりゃ当てれりや確實だけどな、でも当たらなくとも攻撃の意志が見え見えなんだから、普通反撃してくんだろ！」

また雅章と高敏の怒鳴り合いが始まつてしまつた。

犬猿の仲というほどでもないが、犬猫の仲ぐらいには相性が悪い。罵り合いのとばっちりを受け、周りの生け垣やら庭木やらが風もないのに台風でも通過しているかのように幹から激しく揺れる。

「あのー、おもくそ自然が壊れてるんスけど……」

物怖じしないタイプの達人さえもが身震いしてしまうほど激しい勢いで、大きな榎が根っこから倒れてしまった。家に向かつて倒れていたそれを、靈圧を帯びた蹴りでとつさに反対側へと弾き返した千鶴の判断力はさすがの一言に尽きるだろつ。

千鶴の好判断によつて家屋直撃を免れた榎が、達人を直撃してしまつたのはご愛敬だ。

周囲の環境に少なからず影響を及ぼし始めた一人の不仲をいつも通りに残つた一人が修正していく。

「あのね、ちょっとと思つたんだけじさ、麻里愛ちゃんに結界張らしや済むんじやないのかい？ 悪靈退散系の」

千鶴が掴み合いに発展した一人の間に割つて入る。その際、空手チョップ（勿論靈圧武装有り）により一人を引き剥がすことも怠らない。

「そうつすねー、じゃあ俺ら正直に名乗つちやいますか、【岩国神奈の手下です】ってや」

自虐気味に笑いながら、達人がそれに乗る。どうやらこの一人は、勇気のみとの接触は絶対に無理であると諦めてしまつてゐるらしい。

提案を受けた高敏と雅章が、千鶴と達人を睨み付ける。

「おまえら肝心なこと解つてねえのな。一度機嫌損ねちまつたらもう一度と接触できなくなつちまうんだよ！」

運転者の視界を著しく奪つていた丁字路右側の不格好な生け垣が二人の怒気に触れ、3メートルほど跳ね上がつた。麻里愛守備隊到着からたつたの一時間少々で、多くの命を轢き潰してきた【死の交差点】が完全崩壊してしまつた。

生け垣の壊滅によつて全く見通しの効かなかつた丁字路の右側は、今までとは逆に恐ろしいほど視界が開けてしまつた。これでおそらくは死亡事故の数も半分ぐらいには減つてくれることだらう。

思わぬところで人様の役に立つてしまつたものだが、彼らが問題にしなければならないのはあくまでも麻里愛であり、死の交差点ではない。あまりの間抜けさに四人は腹を抱えて笑い出してしまつた。「はあ、ひい、久々に笑つたあー。さて、麻里愛ちゃんどうしそうか？ そろそろ纏めちゃわないとね」

気付けば、いつの間にか場を仕切つてゐるのが雅章隊長から千鶴

へとスイッチしている。

「あくまでも俺らは、広目天とも増長天とも無関係だつていうスタンスは崩せないよな」

「そーっスねー」

「じゃあよ、これどうよ。俺らの目的は佐島七海を成仏さすことだつてことにしてまーチャンの背中、間借りさしてもらうの」この高敏の提案に、一同ははつとした。彼らは護衛対象である麻里愛のことばかり考えてしまい、事件の根底にあるものを丸つきり無視していくことにやつと気付いた、否、気付くことができたのだ。

「そうだな、それで行こう」

雅章の一言で、漸く方針は固まつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7631a/>

「なんで……？」

2010年10月14日18時40分発行